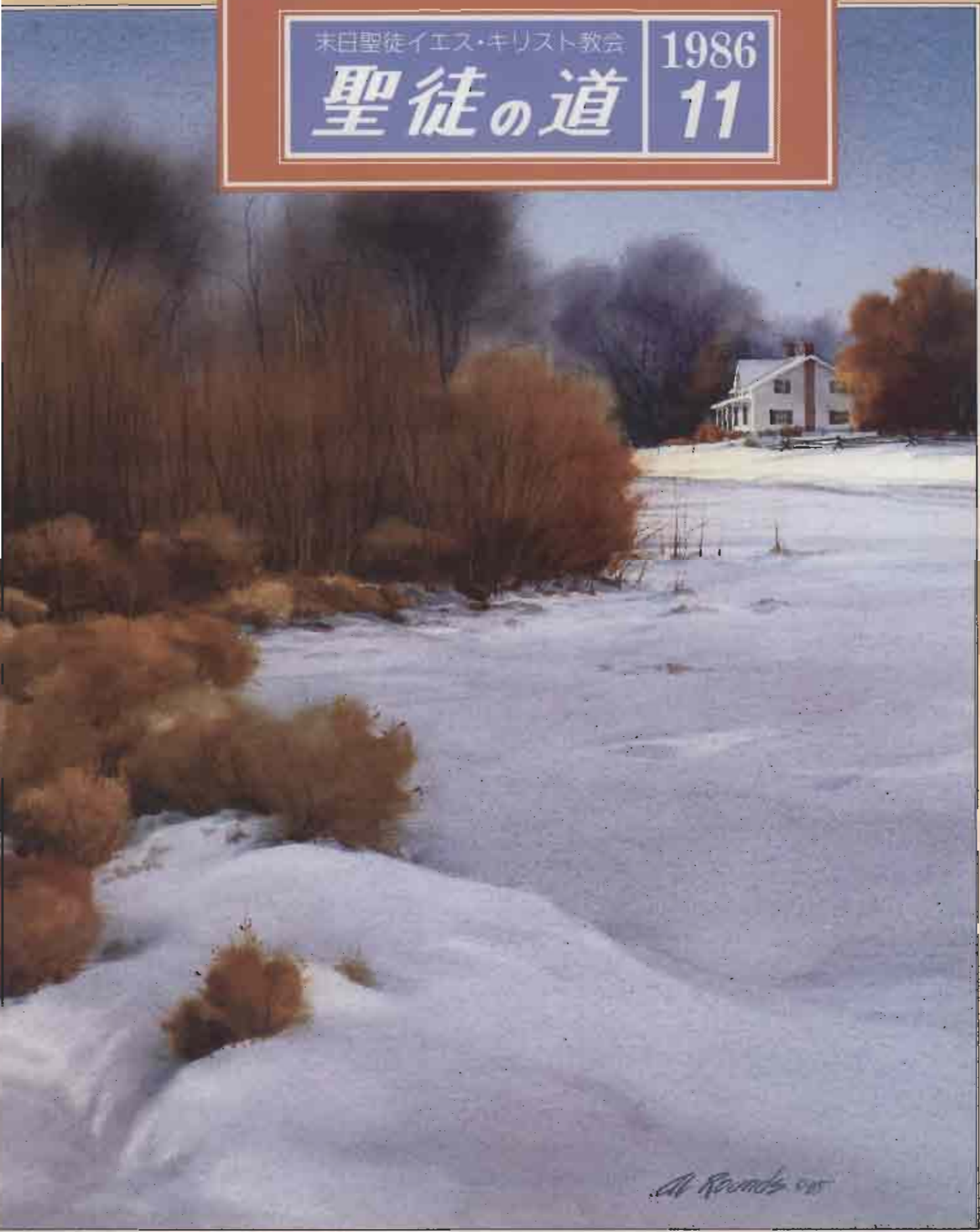


末日聖徒イエス・キリスト教会

聖徒の道

1986

11



Al Reynolds '85

聖徒の道

1986年11月号

本書は「エンサイン」「ニューエラ」「フレンド」の記事を抜粋した、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン
十二使徒定員会：マリオン・G・ロムニー、ハワード・W・ハンター、ボイド・K・パッカー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード

顧問：ジョセフ・B・ワースリン、ジョン・H・グローバーク、ジェームズ・M・バラモア、ヒュー・W・ピノック

編集長：ジョセフ・B・ワースリン

教会機関誌ディレクター：ロナルド・L・ナイトン

編集主幹：ラリー・A・ヒラー

編集副主幹：デビッド・ミッチェル

子供の頁編集：ダイアン・ブリンクマン

レイアウト/デザイン：シャリ・クック

制作：レジナルド・J・クリステンセン

マーケティング・マネージャー：トーマス・L・ピーターソン



聖徒の道 1986年11月号第30巻第11号
発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
〒106東京都港区南麻布5-10-30
電話 03-440-2351
印刷所 株式会社 精興社
定 価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)
半年予約1,100円(送料共)
普通号150円,大会号(1,7月号)350円

International Magazines PBMA0518JA
Printed in Tokyo, Japan.
Copyright ©1986 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.
●定期購読は、「聖徒の道予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 管理本部経理課 振替口座番号/東京0-41512)にてご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先……〒106東京都港区南麻布5-10-30/末日聖徒イエス・キリスト教会 管理本部経理課 ☎03-440-2351(代表)●「聖徒の道」についての配送のお問い合わせ……〒194東京都町田市小川1704-1/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター/☎0427-96-2820

表紙：冬のジョセフ・スミス・シニアの家、アル・ラウンズ画、マイケル・アーランダー夫妻の好意により掲載

● — も く じ

トーマス・S・モンソン第二副管長	ジェフリー・R・ホランド	1
神権定員会の職務	ジョセフ・B・ワースリン	9
家に向かって	ハインツ・レーデ	15
質疑応答(イエス・キリストは全宇宙の救い主)	ラリー・C・ポーター	19
モルモネード		22
そんなはずはない	リチャード・W・クロムプ	23
チャーチニュース、各地のたより		
子供のページ(別冊付録)		
おもちゃばこ		1,8
8さいの王ヨシヤ	「聖典からの物語」より	2
エレン・ピューセル・アンサンク	シャロン・ビーギロウ	5

トーマス・S・モンソン

第二副管長

常に「主の用向を有てる者」となって

ブリガム・ヤング大学学長
ジェフリー・R・ホランド

ソルトレーク・シティー、バレービュースターキ部第6、7ワード部の新監督、23歳のトム・モンソンは、スターキ部神権指導者会が進むにつれ、異常に落ち着きをなくしていきました。その様子からは、今すぐにも集会をあとにし、市内の高台にあるベテランズ病院に車を走らせた気持ちがありありと伺えました。その晩家を出る前に、彼は、ワード部のある年配の会員が病気のため入院するという知らせを電話で受けていたのです。そして電話の相手に、病院に寄って祝福を授ける時間があるかどうか尋ねられ、多忙な若い監督は、スターキ部の集会が終わり次第病院に駆けつけ、祝福を授けようと快く引き受けたのでした。

集会の最中、監督は「会をあとにして、今すぐ病院へ行きなさい」という一層強い気持ちを感じたのです。しかし会では、スターキ部長が話者として壇に立っていました。管理者の話の途中に席を立ち、しかも出席者全員の前を通過して建物をあとにしてしまうことほど失礼なことはありません。彼は心を痛めながらもスターキ部長の話が終わるのを待ち、閉会の祈りに入る前に、ドアの方へ急ぎました。

若い監督が、病院の4階の長い廊下を走って行くと、目指す病室の外の慌ただしさが目に入ってきました。すると彼の

前に立ったひとりの看護婦がこう尋ねました。「モンソン監督でしょうか。」

「はい、そうです。」彼は不安げに答えました。

「お気の毒でした。患者さんは亡くなる直前まであなたの名前を呼んでおられました。」

トーマス・S・モンソンは必死で涙をこらえると、向きを変え、夜のやみの中に戻って行きました。彼はそのとき、そこで、二度と再び主からのささやきに従い損ねることがないように、そしてまたまの力が注がれたときにはすぐにそれと気づき、導かれるままに行動し、「主の用向を有てる者」(教義と聖約64:29)となると誓ったのです。

新しく教会の第二副管長に召されたトーマス・S・モンソン副管長をよく理解するには、まず彼の生活にみたまのささやきがたびたびあったこと、またそれらの導きに従うという若くして立てた誓約を、彼が忠実に守り通してきたことを知らなければなりません。実に彼の生涯は、これまでもそうであったように、聖霊が今なおすばらしい霊的なメッセージを書きつづっている聖なる原稿とでも言えましょう。このような点でも、またほかの点でも彼は年老いたニーファイに非常によく似ています。彼は「大そう若く」し

て召しを受けています。すなわち、22歳で監督に、27歳で副スターキ部長、31歳で伝道部長に、36歳で使徒に(過去53年間で最年少の使徒)、そして58歳で副管長に(今世紀最年少の副管長に)召されています。彼はまた「身のたけも高く」、若いときから印刷業を営む父の傍らで働いてきた強健で快活、エネルギッシュな人です。

また、モンソン副管長は、謙遜さと信仰の面では若いニーファイにも決して劣りません。彼がこれまで立派に達成してきた事柄は、どれもいかなる障害にもめげず「主が命じたもうたことを行って行く」(I ニーファイ3:7)という彼の強い決意に基づくものでした。しかも、彼はそれらを「何をせねばならぬのか、前以てそれを知らずにただひとすじに『みたま』に導かれ(る)」(I ニーファイ4:6) ままに行なったニーファイと同じように実行してきたのです。このような人が「わがシオンを起さんと努むる者」として支持されても不思議はありません。なぜなら、「かれらは聖霊の賜と能力とを受」ける人だからです。(I ニーファイ13:37)

これらの約束を考え合わせてみると、1944年3月のあの日、16歳のトム・モンソンの頭上に手を置き、祝福を授けたス



テーキ部の祝福師フランク・B・ウッド
ベリー兄弟ほど予知能力の優れた人はい
なかったでしょう。彼は次のような祝福
を授けています。

「……聖霊があなたに注がれ、あなた
にとってそれは靈感となり、導きとなる
でしょう。またそれらは、あなたが働く

ときに力となり、過去のことを思い起こ
させ、これから後のことを教え示してく
れるに違いありません。……

あなたは同胞の中にあって指導者とな
り……福音のメッセージを伝えるために、
世に出て行く特権が与えられ……識別の
みたまが与えられるでしょう。……

導きを願って謙遜に主に求めてくださ
い。そうすれば、あなたが召される高い、
聖い召しきよにあって……取るべき正しい道
を知るに違いありません。……」

外見はなんら普通の若者と変わらない
彼に、このような特別な祝福を授けたあ
との祝福師の気持ちは、想像する以外に

ありませんが、おそらくウッドベリー兄弟には、その時点で、彼の将来がいか「気高く聖い」ものであるかがわかっていたのでしょう。

トマス・スペンサー・モンソンは、1927年8月21日日曜日の朝、ユタ州ソルトレーク・シティで生まれました。彼の両親G・スペンサーおよびグラディーズ・コンディー・モンソンは、勇敢なスウェーデン系英国人とスコットランド人で、謙遜で働き者のやさしい人たちでした。この夫婦にはすでに、娘のマジョリーがおり、彼のあとにもロバート、マリリン、スコット、バーバラの4人の子供が誕生しています。

直系、傍系を問わず彼の家族は、若いトム・モンソンの生活に、ことのほか重要な役割を果たしてきました。彼の祖父コンディーは、町の中心部近くに土地を購入し、そこに自分の住居を建てました。また4人の娘夫婦にもそれぞれ家を建ててあげています。そのお陰で、彼は同じ土地に住んでいるコンディー家のおばたちとはもちろんのこと、ときどき集まってくるコンディー、モンソン両家の親戚とも親しいつき合いを続け、数々の楽しい経験をしています。

彼の家はいわゆるぜいたく品の整った家ではありませんでしたが、(彼は、冬の間自分の寝室がいかにか寒かったかを覚えています)若いトムのやさしい心と慈愛に満ちた性質は、間もなく彼の関心を身近にいる自分より不幸な人々に向けさせていったのです。

彼の子供時代の経験は、神が定めたもうた一訓練過程であったように思います。彼が後に、自分の生まれ育った第6、7ワード部の監督になったとき、そこは会員数1,060人のうち未亡人が85人もいる、福祉を必要とする最も大きなワード部になっていました。

年若いモンソン監督が毎年クリスマスシーズンに、自分の休暇を一週間ほど使い、ワード部内の85人の未亡人全員を訪問した話は多くの人々の知るところですが、最初の数年間、彼が彼女たちにプレゼントとして持っていったものが自分の家の養鶏場でみずから育てためんどり雌鶏だったことを知る人はそう多くありません。彼

女たちの監督の責任を解任されて30年以上もたちますが、モンソン副管長は毎年クリスマスになるとプレゼントを手に、今なお健在な何人かの姉妹たちを一人一人訪問し続けています。

彼女たちが亡くなると、モンソン兄弟はどんなに忙しくても必ずワード部に戻り、葬儀で話をします。教会の現在の指導者の中で彼ほど多くの葬儀で話をしてきた人はいません。多いときは、日に3度も葬儀に参列することもありました。しかも、彼が監督だった頃にどこかで出会い、愛した一般の人々、そして、モンソン長老が取りあげなければおそらくだれにも知られないだろうと思われるような人々でも、実に親しい内容の話が多いのです。

「トムは、あまり優秀でない人たちの味方、恵まれない人たちの闘士です。」昔からの友人、ウェンデル・J・アシュトンがこう語っています。「たとえばバスケットの試合に人を招待するときでも、裕福な人や有名な人、実業家などではなく、子供の頃から知り合いのごく普通の人を連れて行くんです。彼は松の木みたいな人ですよ。てっぺんの方は空高く伸びていても、枝は太くて地面の方に低く伸びている。そして下の方で助けを求めている人々に避け所を与えてあげるんです。」

「あまり知られていませんが、モンソン兄弟は、町周辺の多くの老人ホームでみずから申し出て宗教教師をしているんですよ。」十二使徒定員会で15年間、モンソン長老と席を隣り合わせてきたボイド・K・パッカー長老はこう語っています。「彼は忙しい人ですが、スケジュールが許す限りいつでも、また、時間が取れないときでもあえて訪問を欠かさないようにしています。」

決して悪意はなかったのですが、かつてある人が、もうろくした老人たちのために時間を取るのは無駄ではないかとモンソン副管長に語り、こう提案したことがあります。「モンソン長老、その時間で息抜きしてはいかがですか。彼らには、長老がどなたなのかわかっていないんですよ。」

これに対し、モンソン長老は毅然きぜんとしてこう答えたのです。「彼らが私のことを

知っているかいないかは問題じゃありません。彼らが私のことを知っているから話しかけているのではないんです。私の方が彼らを知っているから話しかけているんです。」

デゼレトニュース紙の発行者であり、彼の長年の友人であるW・ジェームズ・モーティマーはこのように述べています。「私は過去25年間、仕事、教会、また個人的な面でモンソン副管長と行動を共にしてきましたが、彼のような人はあまりいないと思います。彼は実にすばらしい能力の持ち主ですが、決して謙遜さを忘れません。また知性も鋭いものを持っています。知恵によって常にそれをやわらげています。彼はまた、与えられている権力を正しい判断のもとに行使しています。奉仕と誠実な行ないを通して、彼は人々の愛を勝ち得ているのです。」

十二使徒定員会でモンソン副管長と同僚であったジェームズ・E・ファウスト長老はこのように述べています。「この世で、トム・モンソンほど忠実な人はいません。いったんトムと知り合いになった人は、永久に彼の友達になるのです。そういう人ですから、何かを、特に人を忘れてしまうようなことは決してありません。」

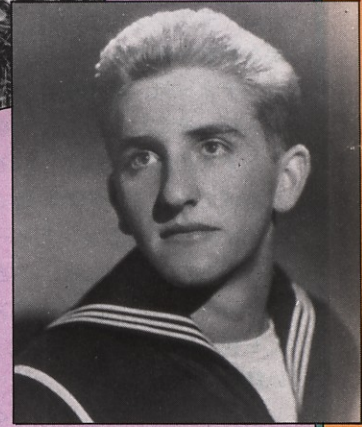
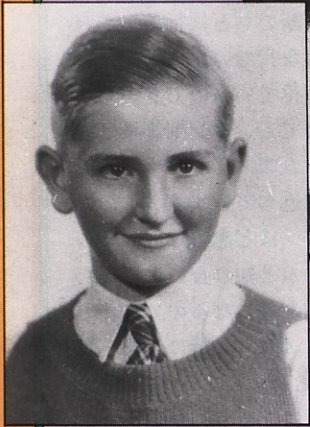
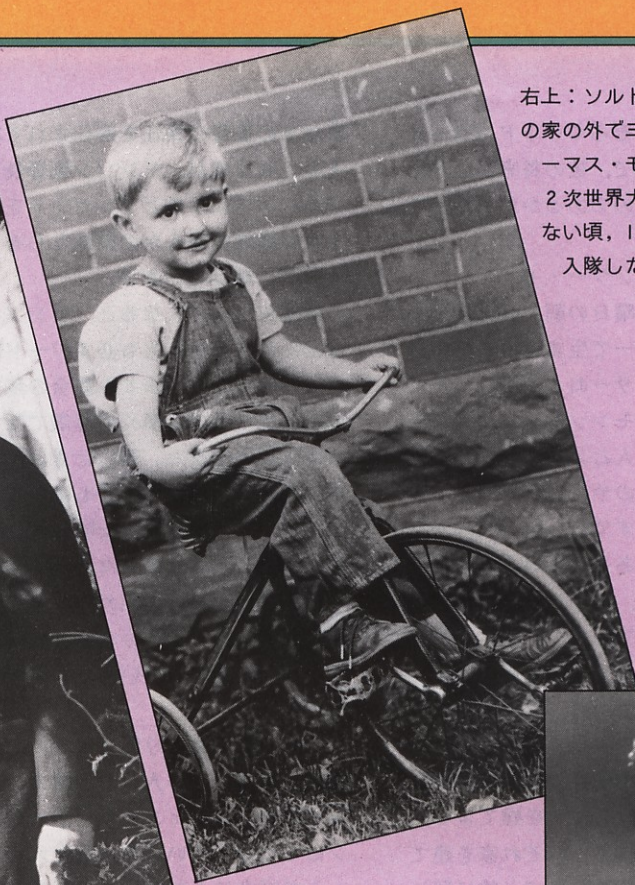
モンソン副管長は、そうした忠実さや人々に献身的に尽くす態度を、ずいぶん若いときに身につけているのです。「彼は、大抵の男の子がしないようなことをきちんとやり遂げる子でした。」 temple ピュースターキ部の副スターキ部長としてモンソン兄弟と働きを共にした、生涯の友、彼の前監督ジョン・R・パートはこのように述べています。またこう付け加えています。「若いにもかかわらず、彼は定員会の副会長たちと会うたびに、彼らにやる気を起こさせる人でした。普通、若い子なら衝動に駆られていろいろなことをするものですが、トムは違いました。彼は常に価値あることをする子でした。これは今日まで続いてきています。私は、彼が価値のないプロジェクトのリーダーになった姿を見たことがありません。彼には、み業を進めさせるような霊性が身につけているのです。彼は実に、霊の巨人です。」

ほかの多くの場合と同様に、17歳のト

右上：ソルトレーク・シティーの家の外で三輪車をこく幼いトーマス・モンソン。右下：第2次世界大戦終結まで1年もない頃、17歳で海軍予備隊に入隊したトム・モンソン。



左上：「穏やかな、奥深い強い信仰を持った女性」である妻のフランシス・ジョンソン・モンソンと一緒にモンソン副管長。左下：監督に「大抵の男の子がしないようなことをきちんとやり遂げる子」と言われた。少年時代のトム・モンソン。



ムに、またもやまぎれもないみたまのささやきがあり、特別な影響を与えました。彼は、その日一緒に軍隊に入隊したほかの41人の新兵とは別に、通常海軍（4年間の勤務のち解雇が約束されている）より上の海軍予備隊（戦争継続期間に6カ月間上乗せさせられる）に入隊したのです。これは熱烈な祈りののちに決断したことでした。

彼の入隊後数週間もしないうちに、ヨーロッパにおける戦火は消え、戦いが終わりました。そしてその数カ月後には、太平洋に平和が訪れたのです。軍隊で積極的に任務に取り組み始めて1年たないうちに、海軍少尉トーマス・S・モンソンは帰還し、軍隊に入らなかったクラスの人々に一学期分の遅れをとっただけで、ユタ大学を優等で卒業しました。彼はみたまの導きのままに、戦後の3年間を軍で無為に過ごさなくてもよい方を選

ぶことができたのです。彼自身は少しも気づいていないようですが、そのときでさえ、形の違う戦いのために、また実際の戦いよりはるかに長い軍務のために、彼は「神の武具」（エペソ6：11）で身を守られていたのです。「主の用向を有てるもの」であった彼にとって、この期間は非常に意味のあるものとなりました。

彼の真心にあふれる人生という書物の一章を美しく飾っているのは、フランシス・ジョンソンとの出会いです。「父の立身伝の半分は、母の立身伝でもあるのです。その半分について知っている人はあまりいないと思いますけど。」娘のアン・モンソン・ディブが語っています。「父は以前大会で『作者不明』というテーマの話をしたことがあります。それは、多くのことを犠牲にし、忠実な働きをしながらも決して人に知られない人々についての話でした。実は、その内容が母にぴっ

たりなんです。多分、母のことを書いたのではないかと思います。母がいなかったら、父はこれまで成し遂げてきたようなことはできなかったと思います。」

このふたりの結婚こそまさに、神の定めたもうた結婚であったと言えるでしょう。トムがジョンソン家を訪れた最初の晩、フランツ・ジョンソンは興奮ぎみにこう言ったのです。「モンソン……モンソン、これはスウェーデン系の名前だね。」

「はい、そうです。」若い求婚者が素早く答えました。

すると、ジョンソン兄弟は衣装ダンスの引き出しから、ふたりの宣教師の写っている写真を1枚取り出してきました。そしてひとり指さして尋ねたのです。「君はこのモンソンと関係があるのかね。」

「はい、これは私の大おじのエライアス・モンソンです。」若い訪問者ははっき

りとそう答えたのです。

ジョンソン兄弟は、目に涙を浮かべながら感激した様子で言いました。「彼こそスウェーデンの地で、私の父や母に、そして家族全員に福音をもたらしてくれた人ですよ。」

そうした確かな土台の上に、トムとフランスのロマンスは深まり、ふたりはついに1948年10月7日、ソルトレーク神殿において、永遠の結婚をしたのです。

「結婚したばかりの頃のトムは、ワード部の書記をしていましたし、それからYM（若い男性）の組織の会長もしました。その後、次々といろいろな責任を与えられるようになったのです。」モンソン姉妹はこう振り返っています。「結婚して間もない新妻が、それらにどう対応しているのかと聞かれたことがあります。夫が主のみ業のために働いているのを犠牲と思ったことはありません。それを通して私にも、また子供たちにも祝福がきました。主人は、教会のためになることであれば、なすべきことをきちんと果たすよう、私が願っていることをよく承知していました。」

「37年間の結婚生活で、フランスが私の教会の責任に不平をもらしたことは一度もありません。」モンソン副管長は愛情を込めて語っています。

「この37年間、私は昼夜を問わず、何日間も家を空けることがありましたし、集会で彼女と一緒に座ることもめったにできませんでした。本当に、彼女のような人はそうはいません。いや、絶対にいないと思います。彼女はあらゆる面で私の支えになっています。彼女は、穏やかな奥深い強い信仰を持った女性です。」

フランスに支えられ、数々の教会の責任をこなしながら、モンソン兄弟は、やがて副管長の職に就くべく備えを着々としていったのです。

教育に非常に熱心だったトムは（ユタ大学では「優秀卒業生賞」を受け、ブリガム・ヤング大学では「名誉法学博士号」を受け、この大学の理事となっている）、1948年、経営学を専攻していたユタ大学を優等で卒業しています。「トムは優秀な学生でした。」モンソン兄弟の大学での前学部長O・プレストン・ロビンソン博士

は当時を思い起こしてこう語っています。「彼の手がけたものはみなAでした。私は、彼のことが世の人々にもっと広く知れわたる日が必ず来ると、当時そう思いました。彼は大学で、私によく手を貸してくれました。その後、私と一緒に教える立場に立ち、それからデゼルトニュース社に入り、私と一緒に仕事をしました。後になって彼のために働けたことは私にとってすばらしい特権です。私には、彼をひとりの男として、また真実の友として語り尽くすことはできません。ただ言えるのは、息子のように愛しているということだけです。」モンソン副管長の決意の固さは、教会幹部に召されて数年後、ブリガム・ヤング大学で経営学の修士過程を修めるといふ彼の姿にはっきり見ることができました。

若い頃に就いたデゼルトニュース社での広告業務の仕事は、1959年から1962年まで、カナダ伝道部の伝道部長としての責任を受けたことで中断しました。この伝道部は、地理的に非常に広範囲にわたっており、当時はまだステーキ部がひとつもなく、満足な建物も数えるほどしかありませんでした。

「彼はその伝道部に、すばらしい影響を残しています。」以前宣教師だったF・ウェイン・チェンバレンは当時のことを思い返してこう述べています。「当時の彼は、何人かの専任宣教師より年下でしたし、彼自身、伝道の経験がありませんでした。しかしオンタリオ州トロントに着任してすぐ、彼は自分の責任を自覚したのです。伝道部内を足早に一度回っただけで、彼はすべての宣教師の名前を覚え、教会員と仲良くなりました。そして行く先々で人々を勇気づけ、ついには伝道部全体を完璧なまでに活気づけたのです。」この若い伝道部長の指示の下で、カナダ東部の教会は栄えていきました。

ソルトレーク・シティに戻り、教会のいくつかの中央委員会で1年半余り働いたあと、トーマス・S・モンソンは、1963年10月4日、十二使徒定員会会員に召されました。

使徒としての仕事のほかに、モンソン兄弟は、ボーイスカウト・オブ・アメリカの国内実行委員会（彼はこの会より、

スカウトの名誉あるシルバー・バッファロー賞を受けている）の仕事や一般市民に地域社会の改善を奨励する市民発議団体、すなわち、プライベート・セクター・イニシアチブの、合衆国大統領（ロナルド・レーガン大統領）特別専門委員会の委員としての仕事など、専門家としてまた市民としての重要な義務を負うようになりました。

「トムは、対象が教会員であるなしを問わず、同等に指導力を発揮し、気楽に行動しています。」十二使徒定員会にあって同僚であったニール・A・マックスウェル長老はこう語っています。「彼の優れた経営力、行政手腕は、学問を通して、また専門家としてのいろいろな機会を通してのみ培われたものではありません。もっと奥深いもの、そう、生まれながらに具わっていたものと言えるかもしれません。彼は、あまり時間をかけずに問題の内容を把握し、頭に入れることのできる人です。ほかの人たちがどこから手をつけようかと迷っている間に、彼はほとんどの問題の重要な部分を詳細に把握してしまうのです。」

ローマカトリック教会の会員として、ソルトレーク地域の指導者であり、ソルトレークトリビューン誌のかつての発行者であるジョン・W・ガリバンはこう述べています。「トム・モンソンに出会ったことのある人は、みな彼の友達になります。この暖かみのある誠実な人、人々に愛を惜しまない彼が隣人を愛するのは、戒めだからではありません。トム・モンソンは、全人類を愛する人だからこそ皆さんの友達になれるのです。これは、彼の持って生まれた性格でしょう。トム・モンソンが大管長に昇進したことで、この教会は友情を通じ、この地域に特別な一致をもたらしてくれました。」

末日聖徒以外の人々との仕事を通して身についた、モンソン副管長の外交手腕は、20年近くにもおよぶ東ヨーロッパ諸国での活躍の中にはっきりと現われています。1982年8月、東ドイツに最初のステーキ部が組織されるまでにこぎつけたあと、1985年6月29日、フライベルグに神殿が献堂されたことで、彼の個人的な夢が成就しました。

「モンソン兄弟がいなかったら、ヨーロッパのこの地域の発展はなかったでしょう。」親友であり、ヨーロッパ地域会長のジョセフ・B・ワースリン兄弟はこう語っています。「現在ここには、ステーキ部もワード部も教会堂も、そして奇跡中の奇跡である神殿もあります。トムは、自分の持てるすべてを、そうシャツさえもこの聖徒たちのために捧げたのです。私は、彼が実際にスーツやシャツを、そして靴などを人々にあげているのを見ました。東ヨーロッパの貧しい聖徒たちに、スーツを20着はあげていると思います。彼は、みな着古して捨てようと思っていたものだと言うのですが、私にはまったく新品に見えました。」

23年間にわたる十二使徒評議員会の会員として、モンソン兄弟が管理者として活躍した責任は、それはまた貴重な訓練でもあったわけですが、末日聖徒としての全生涯にわたるほどのものでした。伝道、福祉、教育、系図、ホームティーチング、指導者の訓練、コーリレーション、カリキュラムの展開、神権定員会および補助組織のプログラムなど、実に多方面に及んでいます。「彼は組織化における天才ですよ。」バッカー長老はそう語っています。「重要な問題を、必要な経路を経て、さらには必要な点検を受けてうまく処理していける人を選ぶとしたら、私はトム・モンソンを選ぶでしょう。」

「彼の生活は、彼の頭脳と同じように非常に整然としています。」モンソン副管長の有能な秘書リン・F・カンネジターが語っています。「彼は決して引き延ばすことをしない人です。ですから忘れるということがないのです。」そうした幅広い経験と優れた能力は、教会の大管長会エズラ・タフト・ベンソン大管長、ゴードン・B・ヒンクレ第一副管長と共に座し、討議する召しにある彼にとって重要な力となっているに違いありません。

1974年8月のある週のことで、モンソン長老のステーキ部大会での責任が変更になり、長老自身がルイジアナ州シュレブポートステーキ部に行くという予期せぬ出来事が起こりました。土曜の午後は、数々の集会でスケジュールがいっぱいになっていました。そんな中でステー

キ部長はすまなさそうに、ガンに冒されたクリスタル・メスビンという10歳の子供に祝福を授けてもらえないかどうか、モンソン兄弟に尋ねたのです。モンソン兄弟は快く引き受ける旨の返事をし、その子供が大会の会場まで来るのか、それともシュレブポートの病院にいるのかを尋ねました。ステーキ部長は言いにくそうに、クリスタルがシュレブポートから何マイルも離れた彼女の家に居り、そこを離れることができない状態にあることを話しました。

集会のスケジュールを調べ、時間が取れないことを知ったモンソン長老は、代わりにステーキ部大会の中で、出席者の祈りに彼女のことを加えるように提案しました。そして、主がきつとわかってくださり、メスビン家の人々を祝福してくださるに違いないと慰めの言葉を述べたのです。

モンソン兄弟には知らされていませんでしたが、ステーキ部大会より前に、クリスタルの足は切断され、その後、ガンが彼女の小さな肺にまで転移していることがわかったのです。当初、教会幹部からの祝福を受けるために、ソルトレーク・シティーまで出かける計画が立てられていました。メスビン家には、個人的な知り合いの幹部がいませんでしたので、家族は教会幹部全員が写っている1枚の写真をクリスタルの前に置きました。すると彼女はトーマス・S・モンソン長老を指さし、「この人に祝福してもらいたい」と言ったのです。

しかし、クリスタルの症状が急に悪化したため、ソルトレーク行きが見送られたのでした。彼女の肉体は衰えていきましたが、信仰は違いました。彼女はこう言ったのです。「ステーキ部大会には教会幹部が来られるんですもの。モンソン兄弟が来られないはずないわ。私の方から兄弟の所へ行かれないうですもの、主は兄弟を私の方へ送ってくださるわ。」時を同じくして、モンソン兄弟のステーキ部大会での責任は変更され、シュレブポート行きが決まったのです。

クリスタルへの最後の願いとして、家族は彼女のベッドのそばにひざまずき、モンソン兄弟の訪問を受ける機会にあず

かれるよう、もう一度だけ祝福を求めて祈ることにしました。

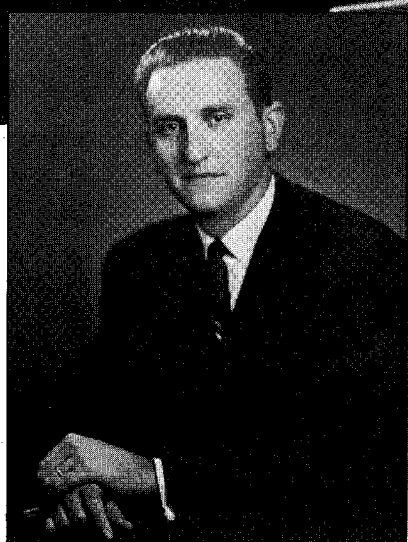
ステーキ部長の方から、モンソン兄弟が多忙なスケジュールのためクリスタルを訪問することができないという言葉聞いたメスビン家の人々は、理解はしながらも、非常に落胆してしまいました。家族はもう一度クリスタルのベッドの周りにひざまずくと、モンソン兄弟の手による祝福を受けたいという彼女の願いがかなえられるよう彼女のために嘆願しました。

メスビン家の人々がクリスタルのベッドの周りにひざまずいたその瞬間、モンソン長老は土曜の夕方の部会の最後の話者として、原稿をそろえていたのです。ところが、説教壇に向かう彼の耳に、短いながら聞き慣れた次のメッセージがささやきとなってはっきり聞こえたのです。「幼子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である。」(マルコ10:14)

モンソン兄弟の目には涙があふれ、原稿がかすんでしまいました。会のテーマに添って進めようとするのですが、クリスタル・メスビンの名前と姿がどうしても頭の中から消えないのです。非常にはっきりと現われる自分の貴重な賜に常に忠実であった彼は、その霊的なささやきに聞き従ったのです。彼は、混乱を招き、犠牲を強いることがあっても、翌日の大会スケジュールを大幅に変更することを指示したのです。それからまた集会は続けられました。

日曜の早朝、何キロも車を飛ばしたあと、モンソン長老は、病のために立ちあがることもできず、弱り果てて話すこともできないひとりの子供を見つめていました。彼女はすでに目も見えなくなっていました。その場面と主の強いみたまに心動かされたモンソン兄弟は、ひざまずくと子供の弱った手を取りました。そしてそっとう呼びかけたのです。「クリスタル、私はここにいるよ。」

すると彼女が精いっぱい力をふりしぼり、弱々しく答えました。「モンソン兄弟、きつと来てくれると思っていたわ。」このいとしい子供の身も霊も、その心



左上：1981年、ブリガム・ヤング大学より名誉ある博士号を受けるモンソン長老。左下：モンソン副管長は、生涯の趣味としてハトを飼育している。2羽のハトを観察中のモンソン副管長。左：31歳でカナダ伝道部を管理する召しを受けた信仰の人、慈愛の人、トーマス・モンソン長老。上：モンソン長老ご一家。(1982年)左からトーマス・L、クラーク・S、モンソン副管長、アン・モンソン・ディブ、モンソン姉妹(椅子に座っている)。

打つシーンを見守ってくださっていたに違いない天父の愛あるみ手にゆだねるといふ祝福の言葉が述べられました。やっと聞きとれるほどの彼女の「ありがとう」といふ言葉は、その祝福に対する、また彼女の歩んできたすばらしい信仰に満ちた生活に対する感動的な祈りとなりました。翌週の木曜日、モンソン長老により提出されていた彼女の名前が、大管長会、十二使徒評議員会の祈りの輪に加えられていた頃、クリスタル・メスピンの汚れない霊は、病気に侵された肉体を離れ、神の安息に入ったのです。

父親としてのモンソン兄弟は、これまで非常に多忙な日々を送ってきましたが、3人の子供たちはだれひとりなおざりにされてきたとは思っていません。「ほかの父親たちは、私たちの父よりもっと家に

いる時間が多かったと思います。でも、私たちの父が私たちと一緒に行動してくれたほど彼らが子供たちと接してきたとは思えません。私たちは、何をすることもいつも一緒でした。これは大切な思い出です。」

モンソン家の長男トムは、カナダ伝道部での多忙な何年間かは、父親と自由な時間を過ごすことがほとんどなかったと言っています。(カナダ伝道部にいた頃は、宣教師やほかの伝道部からのお客を交えず、モンソン家だけで食事をしたのは、3年間のうち3日間だけでした)しかし、幼いトミーは、毎晩寝る前に2階の父親の事務所に行き、父親が何をしているときでも必ずチェッカーの相手をしてもらったのです。「これはその後、数年して私がケンタッキー州ルイビルで軍隊

の初歩訓練を受けていて肺炎になったとき、父がわざわざ祝福しにやって来てくれたときと同様にすばらしい思い出となっています。」トムはこう語っています。

アンが覚えているのは、父親のブリーフケースがいつも開いていたこと、そして父親がその中の書類に目を通しながらも、子供たちをじゃま物扱いせず、自分の仕事の一担を理解させようと、必ず霊的な経験を話してくれたことです。「一番楽しい思い出は、日曜の夜、ステーク部大会での責任や伝道部の出張を終えて帰宅した父が、祝福師を召すときに特別な靈感を受けたことや宣教師たちとの面接で得た信仰が強まるような経験を話してくれたことです。」モンソン家の子供たちは、そのようなすばらしい話をたくさん知っています。というのも、彼らの父親



上：心温まる話の多い、モンソン副管長。右上：デゼレト・プレス社で、当時総支配人だったトーマス・S・モンソンと一緒にデビッド・O・マッケイ大管長。右下：カナダのスカウト野営地を訪れる国内スカウト功労者賞受賞のモンソン長老。

が毎日、毎週、毎月召しを与える際に、また何らかの行動をとる際に特別な力を受け、靈感に満ちたささやきを聞いているからなのです。

息子のクラークは、感動的なすばらしい経験をしています。釣りの途中で父親にリールを巻くように言われたのです。

彼が釣り糸を巻き終わり、さおを船の中に置くと、モンソン兄弟が言いました。「5分後に、お兄さんのトムが弁護士を開業するための試験を受けることになっている。この日のために、法律学校で3年間一生懸命勉強してきたが、きっとドキドキしていると思うんだ。船の中だけど、ひざまずいてお祈りしてあげよう。最初私がするから、そのあと頼んだよ。」

「あれはぼくにとって最もすばらしい経験となりました。」後にクラークはこう語っています。それから数年後、彼はま

たもすばらしい感動的な経験をしています。父親が車の向きを変え、クラークにタカの巣を見せるためにわざわざ60キロ以上も運転してくれたのです。「父のそうした行動は、別に驚くことではありません。父は、困っている人々を見るといつもこういうことをしてきたのですから。」

十代のトム・モンソンがプロボ川で泳いでいたときのことです。休暇で来ていた人々が取り乱した様子で何やら叫んでいました。仲間のひとりが川に転落し、押し流されて渦にのみ込まれそうだったのです。その瞬間、女の人の姿がトムの目に飛び込んできました。彼は、その女の人の方に泳いで行き、つま先をつかむと岸の方に向かったのです。

「女の人の命を救ったということで、みんなから大変感謝されました。でも、私は偶然ちょうどいい時に、ちょうどい

い所にいたので、手助けができたんだと思います。」モンソン兄弟は後にこう語っています。

確固としてみたまの導きに従う近代のニーフай、トーマス・S・モンソンにとって、このようなことは日常茶飯事のように起こっています。彼はちょうどいい時に、ちょうどいい所で、常に「主の用向を有てる者」として活躍しているのです。

ホームティーチャーへの提案

ホームティーチャーは、この記事を用いて、新たに第二副管長として召されたトーマス・S・モンソン長老の紹介や任務について紹介するとよい。

1. 新たに召された大管長会についてのあなたの気持ちや証を述べる。
2. 大切だと思われる部分を担当家族と共に読む。

神権定員会の職務

七十人第一定員会会長会
ジョセフ・B・ワースリン

18 29年5月末か6月の初めに、メルケゼデク神権が回復された結果どのようなことが起こるかについて、予言者ジョセフ・スミスの周りにいた人々がどれほどよく理解していたのかを私はときどき疑問に思います。ペテロ、ヤコブ、ヨハネがジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリに現われた結果、いつの日にか地上の95カ国に及ぶ70万人以上のメルケゼデク神権者と、3万1,000の定員会やグループから成る世界的な神権組織ができることを予測した人は、予言者以外はおそらくほとんどいなかったことでしょう。もし、年2回開かれる総大会の神権会に集うたくさんの兄弟たち、あるいは全世界の教会で毎週日曜日に各定員会に出席する何千人もの兄弟たちを見ることができたら、きっと彼らは驚くに違いありません。

この神権者の軍勢には、「人に……永遠の生命とをもたらす」(モーセ1:39)という神権の偉大な業と主の目的を遂行する実に大きな責任があります。スペンサー・W・キンボール大管長はこのみ業をさらに強調し、教会の使命は福音を宣べ、聖徒たちを完き者とし、死者を贖うことであると述べました。(1981年4月総大会)

これらの重要な目標を達成するために、神権プログラムがそれぞれ組織されています。すべての神権定員会は次の事柄を達成するよう努力しています。(1)個人を霊的に強める、(2)父親と家族を強める、(3)伝道を行なう、(4)系図と神殿の義務を果たす、(5)家族が物質的な



メルケゼデク神権定員会指導者たちには、
その会員たちが よりよい夫そして父親になるよう
教え訓練する責任があります。

必要を満たすよう助ける、(6)常に教会員を守護する。定員会は、メルケゼデク神権者と父親を訓練強化して、神権の責任を果たせるようにするための主要な機関です。ほとんどの教会の霊的な職務は、神権定員会の責任となっています。ジョセフ・F・スミス大管長は個々の神権組織の重要性について、1906年にこのように述べています。

「私たちはこの世に長く生きるなら、末日聖徒イエス・キリスト教会のすべての神権評議員会が、自らの義務を悟り、責任を引き受け、その召しを全力を尽くして遂行し、英知と能力及ぶ範囲で最大限に教会における役職を果たす日の来るのを目にできるであろう。その日が来れば、現在補助組織によって行なわれていることはそれほど必要ではなくなるだろう。なぜなら、神権の正規の定員会によって行なわれるからである。主は初めからそう計画し、認めておられた。そこで主は、すべての必要を神権の正規の組織によって満たす用意をされた。」(「福音の教義」p.155)

教会が年とともに発展するにつれ、メルケゼデク神権定員会の役割は、次第に大きくなってきました。定員会および神権の職務の将来について、ジョン・A・ウィットォー長老は、1937年に次のように説明しています。

「教会の組織は、神権への単なる補助でしかない。神権定員会は指導的地位を占めている。したがってほかのすべての教会組織への模範となるよう、ふさわしく管理運営し、忠実に職務を果たし、完全な奉仕を行なわなければならない。」(「インブループメント・エラ」1937年12月号、p.760)

個人を霊的に強める

すべての教会プログラムや活動の根本は、個人を霊的に強めることであり、普通それは個人に福音を教えることによって達成されます。主はこの責任をメルケ

ゼデク神権定員会指導者に与えられ、長老定員会会長は、誓約に従って定員会会員を教えなければならないと言われました。(教義と聖約107:89参照)これは毎週日曜日の定員会レッスンの基本目標となっています。

1974年以来、聖典が教会のメルケゼデク神権定員会のカリキュラムとなってきました。「メルケゼデク神権者用個人学習ガイド」が、聖典の個人および定員会学習の手引きとして出版されています。定員会指導者には、兄弟たちに福音の教義と誓約を教える責任があります。また、定員会会員たちに、彼らの神権と家族につける義務を教えなくてはなりません。

バウンテフル(ユタ州)第29ワード部の大祭司グループは、こうした責任と真剣に取り組んできました。グループリーダーのウィリアム・G・マクファーランドと彼の補助たちは、大祭司グループ集会でのレッスンを自分たちで責任をもって果たしています。グループが必要としているものを入念に評価し、それに応じたレッスンを学習ガイドから準備します。グループのほかの会員にも教師の責任を依頼することがありますが、自分自身でもしばしばレッスンを行ないます。特定のレッスンが、グループの中の委員会の職務に関連があるときは、その委員会にレッスンを依頼します。

マクファーランド兄弟は、毎週行なわれる神権会の時間の一部を割り、ひとりのグループメンバーに自分の生い立ちについての短い(5分間の)話をするように頼みます。このようにして兄弟間の連帯感と一致を強め、日記や記録をつけることを奨励することができます。このような話は、レッスンや伝達事項とともにテープに吹き込まれ、病気の人や初等協会の教師をしている人など、出席できないグループメンバーに渡されます。生い立ちについての話が全員に行き渡ったら、今度は同じように、毎週ひとりの兄弟に、霊的な体験について話してくれるよう頼

む予定です。

個人を霊的に強める仕事をさらに一歩進めると、お休み会員を活発化させる重要な仕事があります。そのためには、真心からの愛を示し、神殿準備セミナーを行なったり、家庭で個々の家族を教えたりします。それは救い主が、ルカ15:4-6の中で言われた、偉大なる贖いの仕事です。

「あなたがたのうちに、百匹の羊を持っている者がいたとする。その一匹がいなくなったら、九十九匹を野原に残しておいて、いなくなった一匹を見つけるまでは捜し歩かないであろうか。

そして見つければ、喜んでそれを自分の肩に乗せ、

家に帰ってきて友人や隣り人を呼び集め、『わたしと一緒に喜んでください。いなくなった羊を見つけましたから』と言うであろう。」

フェデラル・ウェイ(ワシントン州)ステーキ部の神権定員会は、C・テリーグラフステーキ部長の指導の下に、1977年にステーキ部が組織されて以来、300人以上の長老見込み会員を活発化することができました。ステーキ部長は、メルケゼデク神権定員会にそのプログラムの責任を与え、ステーキ部メルケゼデク神権委員会を組織して定員会指導者を訓練し、毎週進歩状況の報告を受けました。

有能な神権者とその妻が召され、不活発な家族のフェローシップ兼教師として割り当てられています。不活発な家族は、毎週神殿準備セミナーに出席し、さらに割り当てられた夫婦により、その週の間にもうひとつのレッスンを受けます。ステーキ部の長老定員会が組織運営するセミナーが、各ワード部で年2回開かれます。成功の鍵は、毎月定期的に継続してプログラムを実行することです。一定の期間がたつと、活発になった会員が増え、集会への出席率も高まり、什分の一の律法が守られるようになりました。

ジョージ・スキッドモアは2、3年前、



神権者は、次のような伝道奉仕を行なうことができます。
すなわち、伝道に出る、非教会員と友達になる、
子供たちを伝道に出すよう準備する、
そして伝道を経済的に援助するなどです。

サニーバイル（カリフォルニア州）第4ワード部長老定員会の会長でした。彼は定員会の不活発会員を強めるという責任と真剣に取り組み、不活発な夫婦を自分の家に招待し、特別に選ばれた教師により、「神殿準備セミナー」を用いて福音を教えました。3、4年にわたって年2回

開かれたセミナーにより、多くの立派な会員が活発になりました。その中には、現在のワード部指導者も多く含まれています。スキッドモア兄弟は、現在ワード部の監督として、その仕事を引き続き指導しています。ドン・グラッドレイは、自分自身このセミナーを通して活発にな

り、現在は長老定員会会長として、定員会のこの職務を受け継いでいます。

父親と家族を強める

「父親は指導者です。それも最も大切な指導者です」と、キンボール大管長は述べています。「父よ、あなたは正しい道を歩んでいるか」というパンフレットから引用しましょう。「それは過去においてもそうでしたし、将来も変わりないでしょう。父親は、永遠の伴侶の助けと助言と励ましを受けながら、家庭にあって管理する人です。これはふさわしいからとか資格があるからとかにかかわりなく、神が定めた律法であり神との約束なのです。」（「聖徒の道」1975年12月号, p. 531）

家族に対する責任を果たすための訓練を受けることは、父親にとって大きな利益となります。メルケゼデク神権定員会は、父親がその訓練を受けているかを見届ける責任を持っています。神権会のレッスンは定期的に家族のテーマを取りあげており、定員会指導者たちは、あらゆる所で、定員会会員が、よりよい夫となり父親となるよう教え、訓練する責任をますます強く感じています。

アラン・バクザックは、オーバーン（ワシントン州）第1ワード部長老定員会のお休み会員でした。ワード部の定員会指導者たちは、彼に特別な関心を持ち、彼が父親としてもっとよい模範となれるように助けることにしました。そこで、アランと知り合いになったラッセル・スライとローレンス・ハートレーが、アランに、家庭で模範的な父親となり、指導者となることの大切さを教えました。そして、その訓練が長老定員会で受けられることを話すと、アランは聞き入れ、定員会の集会に出席し、よりよい模範となるよう努めました。彼の息子は後にイーグルスカウトになり、伝道に出ました。アランは立派な父親になり、スカウト隊長、ステーキ部伝道部長、そして監督になりました。彼は今、自分のワード部の兄弟

たちに、模範的な父親となることの大切さを教えています。

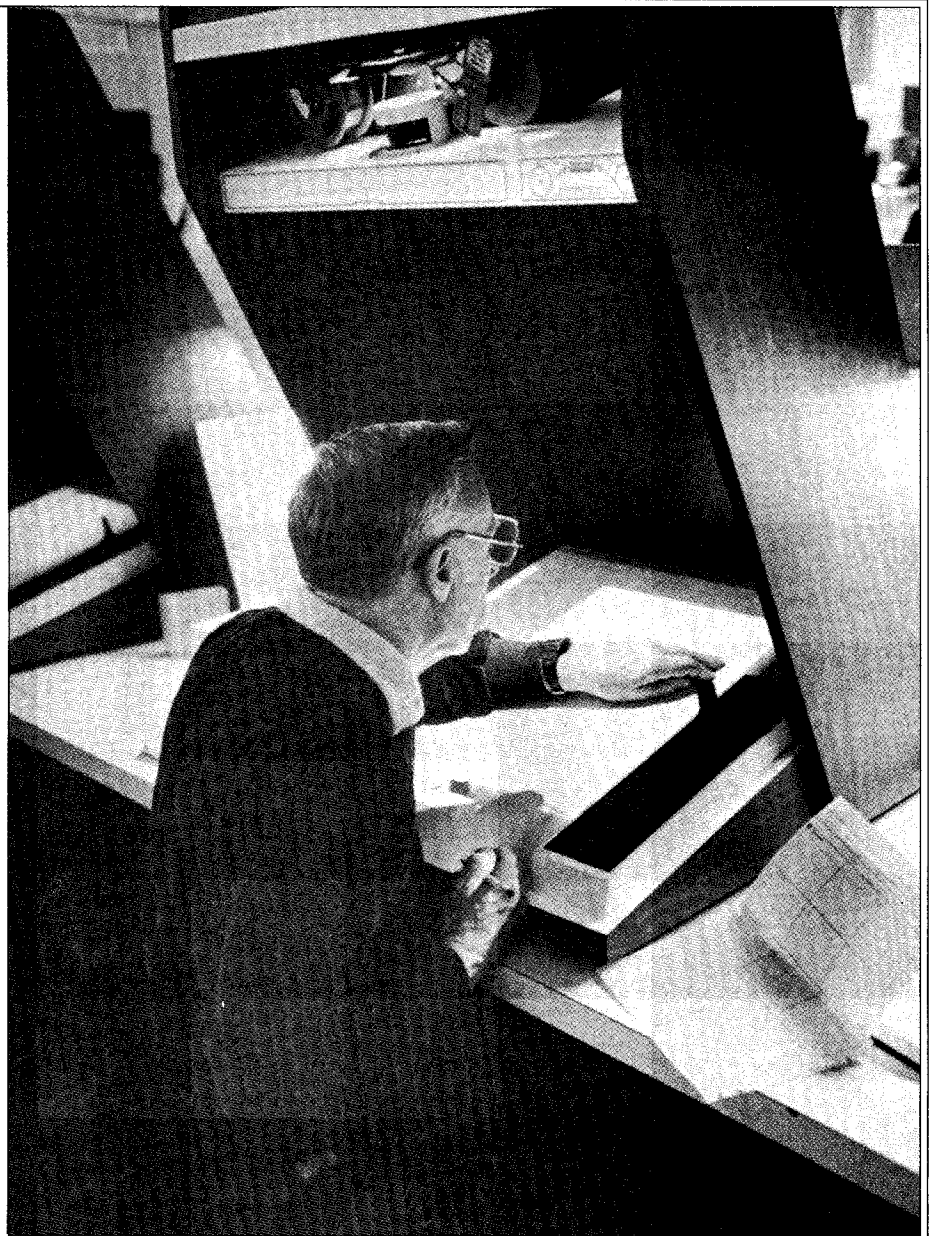
リトルトン（ニューハンプシャー州）第1ワード部長老定員会のアラン・グラチャン会長も、家族の霊的な進歩に対して、父親がもっと大きな役割を果たせるように全力を尽くして助けています。彼は定員会会員に、家族の一人一人と定期的に話し合い、教会の召し、神権の聖任、初等協会からの進級などの事柄を準備するよう教え、励まします。また定員会指導者としてホームティーチングや個人面接で模範を示し、いつも定員会の兄弟たちの私生活や問題について話を聞いて、何か助けることがないかどうか尋ねることにしています。

そして、このステーク部のすべてのメルケゼデク神権定員会は、リチャード・ピッチャーステーク部長の指導の下に、父親を訓練し、良い親となるための技術を教えることに重点を置くように勧められているのです。

学習ガイド、「家庭の夕べアイデア集」、そのほかの承認された資料の助けにより、いずれの定員会グループも、定員会レッスンや補助研修会を、次のようなテーマに基づいて行なうべきです。(1) 家庭の夕べの改善、(2) 家族会議の運営、(3) 家族の祈りを定期的に行なう、(4) 伴侶を支持し励ます、(5) 正しい家族の規律を作りあげる、(6) 家族間のコミュニケーションを活発にする、(7) 家族で娯楽を行なう、(8) 家族で定期的に聖典の研究をする、(9) 子供たちと個人面接を行なう。これらの点で努力すると、家族が強められ、究極的には、定員会、ワード部、そしてステーク部も強められるのです。

伝道を行なう

神権者は、次のような伝道奉仕を行なうことができます。(1)フルタイムの伝道に出る、(2)非会員が福音を聞くことを望むよう友達になる、(3)子供た



定員会指導者たちは、各個人と家族が、
自分自身と死者のために
神殿の儀式を受けることを助けるような活動を
組織しなければなりません。

ち、特に男の子を伝道に出すよう準備する、(4) 伝道を経済的に援助する。

伝道を行なう責任は、すべての教会員にあります。(教義と聖約88：81参照)神権者と神権定員会には、この仕事を率先して行なう責任があります。七十人、大祭司、長老たちにもこの責任があり、定員会会員がこの聖なる責任を果たすことを助けるための方策を立てなければなり

ません。

韓国ソウル西ステーク部のチャン・スン・キムステーク部長は、メルケゼデク神権定員会指導者たちが伝道の業を行なうことに特に熱意を示してきました。そして、定員会指導者が訓練を受けてよく組織され、その務めを効果的に果たせるようになるには、ステーク部メルケゼデク神権委員会の役割が大切であること

を強調してきました。ステーキ部七十人は、専任宣教師と定期的に集会を開くことにより、彼らと良い関係を築き、多くの人々を教会に導いています。またステーキ部の神権定員会は、伝道準備活動を入念に組織してきました。特別なトレーニング・クラスを開き、その重要性を絶えず強調し、多くの若人が、フルタイムの宣教師として召されるように準備してきたのです。

スウェーデンのストックホルムステーキ部のメルケゼデク神権定員会指導者とその会員は、エバート・W・パーシウォールステーキ部長とハーケン・パーム伝道部長の指導の下に、ストックホルム市街の展示会場で行なうユニークな伝道のプロジェクトを企画しました。「スウェーデンの未来は家庭で作られる」と題する見事な展示を作り、案内や、福音のメッセージを伝える映像を専門的に製作しました。この展示は、毎日午前9時から午後9時まで1カ月間行なわれました。彼らの推定によると、1万2,000人以上の人々が展示場を訪れ、その結果、福音を紹介したり教えたりする機会が生まれました。

系図と神殿の義務を果たす

系図と神殿の業は、家族の長の支持の下に実行されるべき個人と家族の責任です。定員会指導者たちは、各個人と家族が、自分自身と死者のために神殿の儀式を受け、個人と家族の記録を作成できるように、活動を組織しなければなりません。

大祭司グループリーダーは、ワード部神権役員会の一員として、系図と神殿の職務を専門的にこなしています。大祭司グループリーダーであるビート・ソレンソンは、ヒューストン・テキサス北ステーキ部のスプリングワード部で、大祭司と会員たちに進んで系図の仕事を行なわせる良い方法を見つけました。彼はワード部の会員たちに、各家族が系図の仕事

をどれだけ行なったか、またどのような助けが必要かを調査しました。60人の回答者の中で、これ以上助けを必要としないと答えた人は、たったふたりしかありませんでした。各家族をフォローアップする話し合いで、ソレンソン兄弟と彼の補助は、それぞれ自分の目標を立てるように会員たちを励まし、どのような助けが必要かを一緒に考えました。それぞれの必要性に基づいた個人への援助が、系図の成功の秘訣なのです。さらにまた彼は、一層広範囲にわたる指示と援助を与えるために、聖餐会の話やファイヤサイド、ワード部広報などを活用する予定です。

アイダホフォールズステーキ部では、系図作業は系図図書館を中心に行なわれています。プレストン・プリムホールステーキ部長の指導の下に、ステーキ部は数年前、充実した系図プログラムを作成することを決め、ステーキ部の大祭司定員会により財政管理された系図図書館を創設しました。系図作業を奨励し、家族と一緒に図書館を訪れるよう提案した結果、ほんの1カ月の間に600人が系図図書館を訪れました。また、4代系図プログラムならびに個人の歴史がどの程度作成されているかを調べるための広範囲な調査が行なわれました。その後、各家族へのフォローアップがホームティーチャーに依頼され、ホームティーチャーは担当家族にどのような助けが必要かを聞いたり、系図図書館へ連れて行ったりしました。このステーキ部では系図探求の促進にたびたび焦点が当てられ、あらゆる集会で系図や神殿事業についての話が行なわれています。

1983年3月の1カ月間に、合衆国の東部のあるワード部は、600キロ以上も離れたワシントン神殿で、941の儀式を達成しました。神殿推薦状保持者に対して、推薦状を定期的に活用するよう奨励した結果、死者のための業がこのように大幅に増加したのです。

家族が物質的な必要を満たすことを助ける

神権定員会は、定員会のメンバーが健康で経済的にも安定し、さらに1年分の食糧と衣服を蓄えるように教え、助けています。また、会員たちが自立し、自分の時間や才能、財産を教会や社会、困っている人々のために使うように教えています。さらに定員会指導者には、不幸な出来事をどのように防ぐかを教え、また不幸な人々が立ち直るための対策を講じる責任があります。

コロンプス（オハイオ州）ウェスタービル・ワード部では、ジェーン・アーノルド長老定員会会長が、1年分の食糧と衣服を蓄えることの大切さについて、特別なファイヤサイドを開きました。彼は出席者にその年の末（数カ月先でしたが）までに、それだけの蓄えをほとんど完成するようチャレンジしました。そして彼は愛情のこもった励ましと模範により、彼らがそれを行なうのを助けたのです。こうして定員会の多くの家族が、この期間に食糧貯蔵についてすばらしい進歩を遂げました。

イリノイ州ブルーミントンの長老定員会会長ビル・マイヤーズは、困っている人々のための奉仕プロジェクトに特に力を入れました。マイヤーズ兄弟は肩を負傷していて何もできないワード部の独身の姉妹たちのために、屋根の修理やそのほか、家の中の修理を手伝いました。

同様に、アップランド（カリフォルニア州）第3ワード部の大祭司グループリーダーのダーベル・アルレッドは、毎月、グループメンバーのための奉仕プロジェクトを計画しています。そのひとつが、父親のいない家庭のためのプロジェクトです。そうした家族に奉仕に行った際に、その家の男の子たちに仕事を手伝わせ、自力で仕事ができるように教えるのです。

常に教会員を守護する

教会の初期から、主は神権者に、「常に

教会員を守護し、彼らと共にありて彼らを強くすべきものとす」(教義と聖約20:53)という責任を与えました。教会がソルトレーク盆地に移ったとき、この責任は、ブロックティーチングを通して行なわれました。後にワード部ティーチングが行なわれ、今日では、主から与えられた責任を果たすためのおもな手段として、ホームティーチングが行なわれています。

ホームティーチングは、監督の指示の下に、メルケゼデク神権定員会により行なわれます。担当家族を定期的に訪問するホームティーチャーとして、ふたりの神権者が召されます。彼らは定員会指導者と監督の代理を務めます。

ブリガム・ヤング大学(ユタ州)第5ステーク部の指導者たちは、ホームティーチングを強化するために、毎回5、6分のトレーニングセッションを頻繁に開くよう、定員会に勧めています。このセッションでは、どのようにして効果的にメッセージを伝えるか、必要な助けに気づくか、片親の家族を助けるかなどについての短い提案を行ないます。「今月はあと何日しか残っていないということを兄弟たちに話すことよりも、新しいアイデアや励ましを与える方が、ホームティーチャーのやる気を起こすのに効果的です」と、ナイルズ・ヘロッドステーク部長は述べています。「学生定員会でホームティーチャーを正しく訓練することができれば、彼らがブリガム・ヤング大学を卒業し、各地の定員会で奉仕するようになるとき、もっともっとすばらしいホームティーチャーになることでしょう。」

テリー・レナハン長老定員会会長は、ジョージア州ウッドストックの定員会を管理するよう召されたとき、ホームティーチングを改善する必要があると感じました。彼はまず、長老定員会が担当するすべての家族を調べ、会長会3人の監督の下に、ホームティーチャーとアロン神権を持つ後輩同僚を3つのホームティーチングチームに編成しました。また、定

例定員会レッスンの中に、ホームティーチングについての特別な訓練会を設け、どのようにして家族と親しい関係を築くか、不活発な会員をフェロシップするか、などといった責任について教えました。さらに、副会長と共に、一人一人のホームティーチャーと定期的に効果的なホームティーチング面接を行なうことを重視し、入念にフォローアップし、励ましました。こうしてホームティーチングの統計は、40パーセントから85パーセント以上に高まりました。効果的な訓練と面接が、よりよいホームティーチングを行なう鍵となったのです。

サンパウロ・ブラジル西ステーク部のアエロポルトワード部の長老定員会会長オデュバルド・サルバドル・アマトも、定員会のホームティーチングを強化することに熱心です。彼が最初に長老定員会を管理するよう召されたときは、家族の20パーセントしか訪問を受けていませんでした。彼は、すべての家族にホームティーチャーが割り当てられ、ホームティーチングの報告がよりよく行なわれるように計らいました。このように述べています。「私の定員会でホームティーチングの実施率が飛躍的に増大したのは、会長会でよく計画し、定員会全体で活動したためです。」

アマト会長はまた、定員会に入ってきた多くの新会員を正しくフェロシップすることに力を尽くしています。会長会のひとりが、ワード部のバプテスマ会に必ず出席し、すべての新会員をホームティーチャーに紹介し、「新会員のためのホームティーチングレッスン」からレッスンを受けるよう取り計らっています。

ダラス(テキサス州)第3ワード部でも、ホームティーチングはうまくいっています。大祭司グループリーダーのジョン・パートランド、七十人グループリーダーのポール・ラーセン、そして長老定員会会長バーン・ラーメンは、ほぼ100パーセントの質の高いホームティーチング

を達成するよう協力しています。彼らはホームティーチャーたちに、家族に心からの関心を持ち、月初めに最初の訪問を開始し、必要に応じて「2マイル行く」努力をし、誕生日を祝ったり、そのほか家族のためにいろいろな奉仕を行なうよう、またその後も何回か訪問するように勧めています。テキサス州ダラス西ステーク部ルーロン・ブラフステーク部長の指導の下に、ステーク部長会と高等評議員は模範を示し、みずからホームティーチングを行ない、また人々を力づけ、靈感を与えるようなホームティーチングの面接を、定期的に継続して行ないました。

この仕事の成果は、それぞれの神権者が自分の義務を果たし、ふさわしい生活を送ることによって、神権の力を得ようと努力するかどうか大きく左右されています。主はこのように言われました。

「およそ忠実にしてわが今語れる二つの神権を得、而してその天よりの召しを全力を尽して遂行する者たちは、『みたま』により聖められてその肉体再新さる。」

これらの者はモーセの息子たちとなり、アロンの息子たちとなり、アブラハムの子孫となり、また教会員にして王国の民となり神の選民となる。

……この故にわが父のもてるすべては彼に与えらるべし。

而してこは神権に属ける誓詞と誓約によりて然るなり。(教義と聖約84:33-34, 38-39)

神権定員会と神権の業は、教会の将来にとって最も重要な鍵となるものです。もしすべての神権者が定員会の目的を洞察し、神権の業の重要性をより十分に理解するならば、み業は飛躍的に進むことでしょう。兄弟たちが霊的な目標に向かい、完全な一致と無私の精神で力を合わせて働くことによって得られる可能性は無限のものであります。そのような方法で達成される神のみ業の力は、かかわるすべての人々に、想像もできないほどの祝福をもたらすのです。

ハイツ・レーデ
(サンドラ・ストーリングスの
聞いた話)

家に



向かって



ヘウルツセン



15歳のとき、私の学校の生徒はドイツ軍の徴兵に取られ、担当の教師も私たちと行動を共にしました。それは第2次世界大戦のことで、私たちの任務は対航空機砲兵でした。

我が家は戦争には絶対反対でしたが、入隊は私の意志で決められる問題ではありませんでした。もし徴兵を拒否すれば強制的に連行されたことでしょう。こうして心ならずも私は両親や妹に別れを告げて、ハイステルベルグの森林地帯のふもとにある、生まれ育った小さな農村ヘウルツセンを後にしたのです。

戦争の始まりとともに、私は絶えず導きを求めて祈りました。正義を守るためにできることは何でもすること、しかし私の状況判断が確かでない場合にはそう教えてくださるよう、主に願い求めました。そしてまた主が私の心に注いでくださる導きを疑うことなく受け入れることを、主と約束しました。

私と級友たちはハノーバーの近くに駐留していました。そこで300人から成る私たちの部隊は、毎日のように一堂に集まってパーティーをやりました。私を除い

てだれもが酒を飲んだり、たばこを吸ったりしていました。初めは私も知らなかったのですが、隊の最高指揮官がパーティーの間ずっと私を観察していたらしいのです。

ある日、彼は私にどうして酒やたばこをやらないのかと尋ねてきました。少し恥ずかしがり屋の私は、酒やたばこが信条に合わないだけだと答えておきました。部隊中で酒やたばこをやらないのも、そして末日聖徒も自分だけだと思っていたからです。

「君がそれをやらないというのには、何か特別の理由があるに違いない。」彼はなおも理由を聞いてくるので、酒やたばこは慎む方が身体のために良いと思うと話して、その話題を少し避けようとししました。15歳という年齢では、酒もたばこもやらないことを笑われたり、男じゃないと言われたりするに耐えられないものなのです。事実仲間の兵隊たちはよく私を笑いものにしていましたし、指揮官もそれを耳にしていたからです。

「君はモルモン教徒じゃないのかね。」

「はい、そうです。」

「どうしてそれを言ってくれないのかな」と彼は言いました。

「私は内気で恥ずかしがり屋なものですから。」私はそう言い訳をしました。「ほかの人たちがどんな反応を示すか、あなたも見てご存じだと思いますが。」

「いや、もし君がちゃんとそのことを話せば、反応は変わるんじゃないかな。」彼はそう答えました。

ある晩のパーティーで、全員が大きなテーブルの周りに座ると、いつものように私以外の人たちは酒を飲んでいました。私は町で買っておいた清涼飲料水でも飲むかと思っていると、やはり指揮官が私の方を見ているのです。

彼は立ちあがると言いました。「レーデ、立ってくれないか。」そして全員に向かってこう言うのです。「レーデがモルモン教徒であることを知らせておきたい。彼は酒もたばこもやらない。私は君たちがこのことを尊重してくれるように願っている。もしこのことで彼をからかう者がいれば、その者は嘗倉行きである。」

私は驚いてしまいました。みんなが私を見つめるので、顔が赤らむのがわかりました。それから指揮官はこうも言いました。「レーデ、これからはみんなが町へ行って飲み過ぎたときには、みんながここへ戻って来られるように面倒を見るのが君の仕事だ。」

それからというもの、毎晩のように私と一緒に行ってほしいというグループが後を断ちませんでした。彼らは私を酒場に連れて行き、店に入ると同時にこう言うのです。「ハインツには酒はいらないよ。彼は我々を連れて帰らなければならないんだ。彼は飲まないから、ちょっといを出さないでくれ。」

もうそれ以上何も言う必要はありませんでした。このおかげで、ほかのどんな方法にも増して友達ができました。賢明な指揮官が気づいたように、こうやって隠し立てをしない方がずっと良い結果をもたらしたのです。みんなは私を心から信頼してくれるので、どんなことが起きても、いつも私と一緒に行こうと誘ってくれて、しかも私を守ってくれるのです。これは私にとって証となりました。私に何かしようとする人はもういませんでした。

戦争が終わる半年前頃に、私は新しく入隊してきた若者たちにレーダー装置の訓練を施す隊の任務に配属されました。部隊はハルツ山地のシーセンに駐留し、私も17歳になっていました。ある日、ドイツについての作文を書かされたことがあり、私の作文が最優秀と認められたのです。将校は私を隊員たちの前に立たせると次のように言いました。「最優秀の作文おめでとう。君がドイツ国家の将校に志願するよう期待している。我々は君のような有能な人材を必要としている。今晚君から志願書が提出されることを期待している。」

「今晚まで待つ必要はありません。」私はそう答えました。「お断わりいたします。」

彼はひどく立腹したらしく、私を処罰しようとして言いました。「明日もう一度尋ねることにしよう。それからあさつても。」

「お言葉ですが、私には志願するつもりはありません。」私は彼にそう告げました。私としては、国家社会主義の精神に納得がいかなかったのです。

私の父はユダヤ人と非常に親しく、家ではいつも彼らのために祈っていました。将校は私にどうしたいのか聞きました。

「グループのみんなと行きたいと思っています。」私が答えると、彼の答えはこうでした。もし私が志願しないと、命令によってそのままここに残り、若者たちの訓練を続けることになるということです。それ以外に選べる道はありませんでした。

しかし自分が残りたくないと思っていたグループに強制的にとどまることになると、かつてはあの将校に命令されたにもかかわらず、まるでそこにいるのが当然とも思えるように、非常な安心感を覚えるのでした。友達はみなロシアへ送られました。戻って来たのはたったひとりで、後の全員は戦死してしまいました。主は私の命を救うために、ふさわしい時にふさわしい場にいるよう、導いてくださったのです。

戦争の間、私はしばしば自分が守られていることを、そしてふさわしい時にふさわしい場へ導かれていると感じたものです。周囲の混乱にもかかわらず、私は祝福され、内なる平安を頂いていました。

やがて戦争も終わりに近づいて、ほかの4人の教官と私はベルリンに赴くよう命令を受けました。当時そこにはヒトラーがいて、戦局は終盤を迎えていました。ロシア軍が進軍しており、すでにイギリスとアメリカの軍隊も私たちのすぐそばまで迫っていました。

私たちはベルリンへ行こうと話していましたが、私はそのことについてずっと祈っていました。そして家へ戻るべきだという思いが強くなっていました。戦争に負けているのにベルリンへ行っても何の益にもならないことは、私たちにもよくわかっていました。一番の親友に向かって私は言いました。「ギンター、ぼくは行かないよ。家へ帰ることにするよ。」

「ぼくも君と同じにするよ。」彼は答えました。彼があまり早く決めるので理由を尋ねると、彼が言うのです。「ぼくはいつも君の顔を見てきた。君が実に信仰深いことをよく知っているし、君を尊敬してきたんだ。君の決めることを信頼しているよ。なぜって、天からの導きで決めているに違いないと思うからね。」

ほかの3人の教官も私たちと行動を共にすることになり、私たち5人はベルリンへ向かう振りをして出発しました。監視の目が届かなくなると、私たちは森の中へ駆け込み、持ってきた平服に着替えました。

アメリカ軍がすでに森に隣接した幹線道路まで来ていました。私たちは山頂まで登って身をひそめていました。というのは、そこならまだかなり安全だったからです。家にたどり着くまでには2、3週間かかりそうでした。一枚の毛布に5人がもぐり込んで森の中で眠りました。しかしそれでは端のふたりは身体が冷えてしまうので、1時間ごとに場所を交替しなければなりません。携帯して行った食料は3日で底を尽き、後は森の中で摘んだ木の実を食べました。時折、ドイツ人の家で食物をもらったこともありました。

初めてアメリカ軍に出くわしたときのことはよく覚えています。うっそうとした松の木立をようやく抜けると、今度は道路を渡らなければならず、そこで枝を押しつけた途端に目の前に巨大な戦車が

戦争の間、私はしばしば自分が守られていることを、そしてぶさわしい時にぶさわしい場へ導かれていると感じたものです。周囲の混乱にもかかわらず、私は祝福され、内なる平安を頂いていました。



立ちただかり、私たちに銃口を向けていたのです。

私は肝をつぶしてしまいました。それまでにアメリカ軍の戦車はおろか、アメリカ人すら見たことがなかったのです。戦車の上部が開いて、ひとりのアメリカ兵が顔を出しました。アメリカ軍に解放されたロシア軍捕虜がてっぺんに座っていました。彼らには私たちが震えているのが見えたようで、アメリカ兵は私たちにどこから来てどこへ行こうとしているのかと尋ねました。私は家に帰りたと思っていますと告げました。すると彼が言うのです。「いやだめだ。ここへ飛び乗って来い。一緒に連れて行こう。次に止まる所で、君たちをキャンプまで連行する

トラックに乗せることにする。」

戦車の上に乗っているロシア兵を見て、私たちの窮地を救ってくれそうな考えが浮かんできました。戦争のさ中でも、それまでの教会生活で学んだ愛の精神がいつも心にあって、私はだれをも憎む気持ちにはなれませんでした。私は兄弟の守り手となろうと考えていました。

私たちのキャンプに捕らわれていたロシア兵はあまり良い扱いを受けていませんでした。彼らには十分な食事も与えられていないのに、私たちの方には豊かにありました。それで私たちの飯ごうを彼らに洗ってくれるように頼み、彼らもそれを承知したのでした。彼らに食べさせるためだけの目的で、いつも飯ごうに食

物を残したのです。

指揮官がそれに気づいて私を呼び寄せて言いました。「君は一体飯ごうをどうしているのかね。」

「ロシア兵が私たちに代わって洗っております。」私はそう答えました。

「私の調べたところでは、中に食べ物が残っていたようだが。」

「全部は食べられないので、その中に残しているのであります。」

「そういうことは厳しく禁止されていることを、君も知っているはずだ。私が君のことを報告すれば、君は困った立場になると思うのだが。2度とやらないように。」彼はそう言って、私の肩を軽くたたきました。

そんなとき、私たちが食物をもらっていたロシア兵のひとりが私に書き付けを渡し、ロシア兵の助けを必要とするときはいつでも、その書き付けを彼らに見せるようにと言ってくれたのです。

私はそれをポケットにしまっておいたのですが、戦車と顔を合わせたときにそのことを思い出したのです。そこでポケットからそれを出すと、ロシア兵に渡しました。読み終えた彼らは突然ドイツ語で「友達、友達」と言い出し、さらに私がロシア兵に食物を分け与えたことをアメリカ兵に説明していました。そしてアメリカ兵は次のように言ってくれました。「君がロシア兵に親切にしてくれたことを聞いたよ。君を連行するのはやめにしよう。さあ、行きなさい。」

私たちはさらに森の中を進み続け、一日と我が家へ近づいていきました。山道から見下ろすと、アメリカ軍の戦車が通り過ぎるのが見えました。アメリカ軍と初めて出会ってからほんの数日後に、私たちは森に囲まれた山の斜面を進んでいたのですが、急に私は奇妙な感じに捕らわれました。私は友人に下りようと言いました。すぐ下に戦車がいるところへ下りようと言ったので、彼らが言いました。「気でも狂ったのか。下に戦車がいるのが見えないのかい。すぐに撃ち落とされてしまうさ。」私はそんなことにはならないと言いました。私は下りなければならぬと思ったのです。

「ハインツ、そのことについて祈ったのかい。」ギンターが尋ねました。

「祈ったよ。」私は答えました。

「それじゃ、ぼくは君と一緒に行くよ。」

彼はそれだけ言うと、あとは何も言いませんでした。

あとの3人は残りました。「君の言うことはおかしいから、我々是一緒に行かないことにする。君たちは敵の手に落ちるようなものさ。」

私たちは全速力で斜面を下りて行きました。私よりもかなり大きいギンターが私の腕を取り、ほとんど私を引きずるようにして行きました。しばらくすると、残りの3人も私たちの後を追って走って来ました。なぜかわからないけれど、一

緒に行きたくなくなったというのです。さらに山を下り続けるとやがて森の外へ出ました。

森を出たところで、左手に小さな農家がありました。木々の間を通り抜けると戸が開いて、中から男の人が現われて言いました。「急いで入りなさい。」私たちが中に入ると、彼はドアをバタンと閉め、牛小屋のわらの下に私たちを押し込めました。アメリカ軍の厳しい規則で、ドイツ兵をかくまうことは禁じられていたからです。

私たちがかるうじてわらの中にもぐり込んだところで、アメリカ軍の戦車とトラックが音を立ててやって来て、山の方へ上がって行きました。彼らがそこまで上がって行ったのは、それが初めてでした。数時間後に戻って来たときには、トラックはキャンプへ連行するドイツ兵でいっぱいでした。

再び主は私たちをふさわしい時にふさわしい場へと導いてくださったのです。アメリカ軍が山を一掃していった後、私たちはその農家を後にして再び我が家への道を進み続けました。その後数日して、もう一度アメリカ軍に足止めを食ってしまいました。私は最初話をしませんでした。英語が話せない振りをしようと思ったのです。彼らの話はこうでした。「彼らをここに座らせておこう。次のトラックに乗せてキャンプへ運ぶことにしよう。」トラックは2、3分ごとに通っていました。

私たちはトラックが来るのをじっと待っていました。1時間以上も待ち続けたのに、トラックは来ませんでした。ついに私はひとりの憲兵隊員のところへ歩いて行きました。

そこで私が自分の身分を明かすと、彼は驚いたように言いました。「ああ、びっくりした。突然英語で話しかけてくるものだから。」

「はい、私は英語を話します。学校で習いました。ちょっと怖かったものだから。」

「いくつになるの。」彼に聞かれて、私は17歳半だと答えました。

「今までどこにいたのかね。」


そこで私は、それまでに私たちが体験

してきたこと、平服を着ているわけ、家に帰りたいと思っていることなど、洗いざらい話して聞かせました。彼は私の話が正しいかどうかを確かめるために、私たちの所属していた部隊へ電話をかけて確認しました。それから長い間私を見つめてこう言いました。「私にも君ぐらいの年の男の子がいてね。もし彼がお母さんの待つ我が家へ帰りたいとだれかに言ったとしたら、彼にその機会を与えてほしいと思うよ。この道を行くとアメリカ軍の司令部があるが、あちらの道へ行けば見つからないだろう。幸運を祈るよ。」

とうとう私たちは家に近づいて来ました。しかし、あらゆる道が封じられていました。電車もなければ、車もバスも電話もありません。仕方なく相変わらず川に沿って森の中をのろのろと進んで行きました。私はその地域をよく知っていたので、近所まで来ていることがわかりました。そこで隣家の裏庭の門を通り抜けるだけだからと考えて、友人たちを残して門を開けました。ところが、地ねずみを追い払うために設置されていた小銃が音を立ててしまいました。その音で飛びあがらんばかりに驚いたのは私だけではなく、隣家の人たちが急いで駆けつけて来ました。しかし私が無事に家にたどり着いたことを知って、とても喜んでくれました。そして友人たちが家路に着く前に食料を妹に持たせて、彼らの待つ森へ届けさせました。

私たちにこれらのことができたのは、主がふさわしい時にふさわしい場へ導いてくださったおかげです。

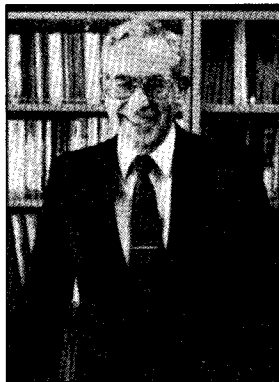
祈りは私にとって力でした。いつも私の力となってくれました。絶えず導きを求めて祈ることで、すべてがうまくいくという非常に平安な気持ちを抱くことができました。そして事実そうだったので、私の愛を主に捧げなかった日は1日たりともありませんでした。それは主が私の命を助けてくださったからだと思います。私は常に主に心を向けてきました。私が主の戒めを守り、主の導きを受けるにふさわしくあれば、主が守ってくださることを知っていました。そして確かに主はそのようにしてくださいました。



イエス・キリストは
天父がお造りになった多数の世界の
救い主ですか。
それとも地球上に住む私たちだけの
救い主ですか。

この深遠な問いが投げかける深い意味について考えるとき、私たちはたちまちのうちに、自己の理解を越えた世界に足を踏み入れようとしていることに気づきます。したがって、ごく一般的なこととお話の方がよいでしょう。イエス・キリストはこの地球の救い主であり、またこの広い天空に無限に存在する、数々の世界の救い主でもあります。今回のご質問については、多くの部分がいまだ明確にされていないことはありますが、幸いにも今までに数々の重要な洞察が加えられています。予言者ジョセフ・スミスや後の教会の指導者は、天父からの啓示や靈感に満ちた聖句を用いて、イエス・キリストがこの地球の救い主であるばかりでなく、ほかの世界の救い主でもあることを教えてくれています。

神の御子は、万物の創造主であり、しかも贖い主でもいらっしゃるのです、両方の見地から考えてみましょう。1830年から1831年の教会初頭の時代に予言者ジョセフ・スミスに与えられたモーセの書には、このことについて重要な鍵となる事実が記されています。モーセが神の栄光に包まれ、神とまみえたときに受けた示現は、「モーセまた多くの土地を見たり。その一つ一つは陸と呼ばれ、その陸の面にはそこに住む人々ありき」(モーセ1:29)という言葉によって表わされています。さらに目が開けて、すべての物



解答者
ラリー・C・ポーター
(ブリガム・ヤング大学宗教研究
センター教育歴史部ディレクター)

が見えたとき、モーセは「何故にこれらのことかくのごときや。神は何をもってこれらのものを造りたまひしや」(モーセ1:30)と、神に尋ねました。その答えはこうでした。

「われわが力の言ことばによりてこれらのものを創りたり。そのわが力の言とは、わが生ひどりこみたる独子ひとりごのことにして恩恵と真理とに満てる者なり。

われは、無数の世界を創りたりし。而して、またこれらはわれ自らの目的ありて造りしなり。而して、わが子によりてこれらの世界を創りたり。わが子とは、わが生ひどりこみたる独子ひとりごのことなり。」(モーセ

1:32-33)

このように、御子は御父のみ言葉のもとに無数の世界を創造なさったのです。この事実は、時の絶頂に至り、使徒パウロによって確認されました。パウロは前世においてイエス・キリストが複数の世界を造る準備をしておられたことを知っていました。

「神は、むかしは、預言者たちにより、いろいろな時に、いろいろな方法で、先祖たちに語られたが、この終りの時には、御子によって、わたしたちに語られたのである。神は御子を万物の相続者と定め、また、御子によって、もろもろの世界を造られた。」(ヘブル1:1-2)

御子がこの地上の贖い主であられることに関連して、予言者エノクはアダムの答について「神の子始祖の罪を贖いたまえり」(モーセ6:54)という天よりの教えを受けました。そして贖いの状態についてはさらに詳しく「わが生ひどりこみし独子の血によりて清められて天の王国に入らざるべからず。かくして汝らすべての罪より清められ、この世に於て永遠の生命の言を受け、来るべき世に於て永遠の生命、まことに不死不滅の栄光を受くるなり」(モーセ6:59)と教えられました。この地球で主がなさる大切な働きが贖いであるとすれば、ほかの世界で主は贖い主としてどのような使命を受けていらっしゃるのでしょうか。1832年、オハイオ州ハイラムのジョン・ジョンソンの家で、予言

者ジョセフ・スミスとシドニー・リグドンは、ほかの世界におけるキリストの使命について「栄光に満ちたる示現」を受けました。

「さて、この子羊に就きて為されたる様々の証の挙句、われらの為す最後の証はすなわち『主は実に生きたもう』こと是なり。

われらは、彼がすなわち神の右に座したもうを見たり。また、御父の生きたもう独子なりと証したもう声を聞けり。

すなわち諸々の世界は彼の手により、彼の手を経て、また彼に因りて先に作られ、また現に作られ、これに住む者たちも皆神より生れたる息子と娘なることを証したもう。」(教義と聖約76:22-24)

ほかの世界でもキリストが救いにかかわられるであろうことは推測できますが、上記の聖句だけでは、はっきりと知ることにはできません。しかしそれは、この「栄光に満ちたる示現」から数年後に、予言者ジョセフ・スミスによって明確化されます。ノーヴー時代(1843年)、予言者は教義と聖約第76章に記されている「天界の示現」を詩によって説明したのです。ジョセフの詩を紹介するにあたって、タイムズ・アンド・シーズンズ社の編集者は前書きに、次のように書いています。

「この世の狭あいな制約を何ひとつ受けることなく、また地上のあらゆる有能な物体を超越して、彼の思いは、ほかの数々の王国へと舞い上がり、永遠の秘密を解き明かす。そして、造られた諸々の世界とほかの天体、それにその世界を制御する律法とそこに住む人々の有様に思いを馳せるのである。」(「タイムズ・アンド・シーズンズ」4:81)

ジョセフの詩は、教義と聖約76:22-24と呼応するものです。

しか
而して今、すべての証はなされたり

真の証人によりて、彼を知りし者によりて

こは、最後にしてなしたる我が証なり
主は生きたもう、実に生きたもう
而して神のみくらの右に座したもう

我、天より出ずる証の大いなるみ声を聞けり

彼は救い主、神の独り子なりと
諸々の世界は彼により、彼の手を経て
また彼に因りて先に作られたり
天にてなされし、このみ業は
疑う術なく明らかなり

世の太初より終わりまで
諸々の世界に造られし万人は
我らを救いたまひし救い主

そのお方によりて救わるるなり
我らは皆、神より生まれし息子と娘
全き真理とみ力により、我らは皆
救わるるなり

(「タイムズ・アンド・シーズンズ」4:82-83)

予言者は「諸々の世界に造られし万人は、我らを救いたまひし救い主、そのお方によりて救わるるなり」と、はっきり述べています。ジョセフはまた、この重要な出来事が真実であることを次のように強調しています。

「我、予言者ジョセフは、神によりて示されたる永遠の縮図を、過去、現在、未来にわたり霊の眼によりて確かに見たり。」(「タイムズ・アンド・シーズンズ」4:82)

ジョセフ・スミスによって明らかにされた真理の数々は、後の指導者たちによって証がなされています。オルソン・ブラットは次のような見解を明らかにしています。「もし原罪に対する罰が、肉体と霊との永遠の分離であるならば、正義はいかにしてその要求を満たし、罪人への

憐れみはいかなる形で示されるのであろうか。その術はあるのだろうか。あるとすれば、またいかなるものであろうか。それは、神の愛する独り子、神のふところに抱かれた方、万物の長子、万物に勝る生得権を持ち、あまたの世界の救いの鍵を持ちたもうお方によるのである。このお方がいで来たり、墮落した人の息子、娘たちの死という罰の苦しみを代わってお受けになる権能を持っておられるのである。」(「オルソン・ブラットの説教と著述」N・B・ランドウォール編, pp. 361-62)

同様に、ジョン・テイラー大管長は、イエス・キリストは諸々の世界の造り主であり「地球以外の世界」をも指揮する鍵を持っておられることを、また諸々の世界にかかわる救いの鍵もお持ちであることを公言しています。(「仲裁と贖罪」pp. 76-77参照)

現在でもこのテーマは聖典を愛する人人によって説かれています。マリオン・G・ロムニー長老は、イエス・キリストが諸々の世界にわたる天父の広大な計画にかかわりを持たれたことを認めています。

「イエス・キリストは万物の造り主であり、救い主である。また全世界の主でもある。死すべき肉体を持つての使命がこの地上において成し遂げられたことは別として、ほかの諸々の世界に住む人々と主の関係は、我々地球の人類と主の関係とまったく同じなのである。」(『全宇宙の主イエス・キリスト』「インブルーメント・エラ」1968年11月号, p. 46)

ブルース・R・マッコンキー長老も同様に証しています。「イエス・キリストは、人間の力では数えることができないほどたくさんのお方の世界の造り主であり、贖い主でもあられます。」(『キリストと創造』「エンサイン」1982年6月号, p. 10)



予言者たちによって述べられている無限の贖いとは、
まさにその言葉どおりである。
地球上に住む全人類と、果てしなく永遠に広がる天空の
あちらこちらに住む人々にまで及ぶ贖いのことである。

また次のようにも証しています。「予言者たちによって述べられている無限の贖いとは、まさにその言葉どおりである。地球上に住む全人類と、果てしなく永遠に広がる天空のあちらこちらに住む人々にまで及ぶ贖いのことである。……そして主の贖罪の力により、これらの諸々の世界に住む人々は、啓示によれば『神より生れたる息子と娘』（教義と聖約76：24）となる。つまり、文字どおり、そして事実無限であるキリストの贖罪が無数

の世界にまで及ぶのである。』（「モルモンの教義」 pp. 64-65）

主は天上の扉をほんの少し開けてください、予言者を通じて私たちにも永遠の世界のごく一部をのぞかせてくださっています。神からほかの天界の存在を知らされたモーセは、その光景に魅了され、もっと知りたいと思いました。しかしながら主は、「されど、この世とこの世に住める人々の話のみを汝に^{なんじ}して聞かす。見よ、わが力の言によりて過ぎ行ける多く

の世界あり。また今ある世界多くあり。これらは人にとりて数限りなし。されど、よろずのものはわれにとりて数えらる。そはよろずのものはわがものにして、われこれを知ればなり」（モーセ1：35）と忠告されたのです。

イエス・キリストと無数のほかの世界と、そこに住む人々との相互関係が、主によってもっと明らかにされるまで、私たちは「この世のこと」を知るだけで満足すべきではないでしょうか。

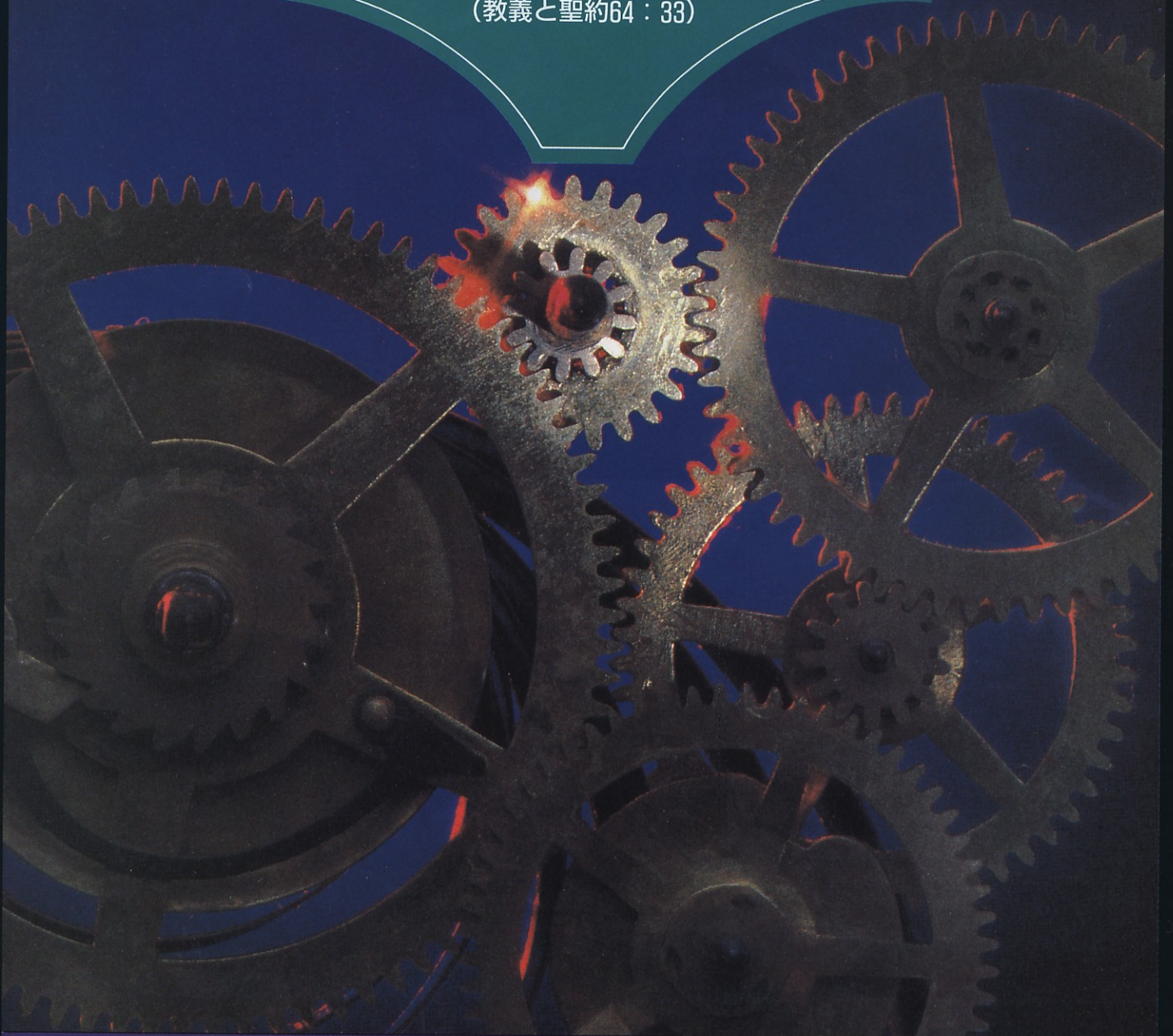
たとえ

小さい歯車でも…

神の王国での一人一人の働きは、ちょうどこの歯車のようです。たとえどんなに小さくとも、あなたの存在がなければ、王国は進みません。主は言われました。

「小なる事より偉大なる事起る。」

(教義と聖約64：33)



アーチ型の通路をくぐって歴史ある町の中心部に入ると、自転車のスピードも上がってきました。ドイツ北部にある美しいリューベックの町の住人を守るために、800年以上も昔に築かれたその頑丈な城壁には、見るたびにいつも圧倒されます。

しかし城壁に感心ばかりはしていません。玉石の敷かれた狭い道路をがたがた走るので、サドルからはね落とされないようにするのに懸命でした。クライネバーグ通りにある小さなアパートの2

リチャード・W・クロムプ

階を目指して、同僚と競争でペダルをこぐと、自転車の前輪についているライトの発電機がウインウインとうなりをあげました。

大抵はピーターソン長老がアパートに一番乗りでした。先輩宣教師だからというのではなく、彼の自転車が真新しい3段変速車で、私のはいわゆるただの自転車だからです。

私たちふたりは飛ぶようにして最後の角を曲がり、アパートに向かいました。

ピーターソン長老はいっばいにブレーキをかけ、自転車から飛び下りると石段を数段駆け上がり、やったぞという表情で、最後のペダルを踏みしめる私を振り返りました。

私たちは自転車を入口の通路の内側に止め、鍵をかけてから、狭い階段を足早に上がり、ここ3カ月の間、我が家と呼んでいる場所へ急ぎました。そして口数少なくそそくさと上着とネクタイを取り、小さな冷蔵庫のところへ行って夜食のヨ

「そんなはずはない。父さんはいつもあんなに元気で丈夫だった！ ドイツに出発するときだって、空港ではぼくをがっちり抱きしめて涙も見せなかったじゃないか。その父がなぜこんなことに？」

そんなはずはない



「父さん、まだそばにいてほしい。ぼくはまだ父さんの子供です。なすべきことを教えてほしい、父さん。」私は小さな窓から夜空の星を見つめてそう思いました。「天のお父様、どうか、父が今あなたと共にいて平安だと、わたしにわかるしるしを何か与えてください。」

ーグルトを出しました。とろりとしたプレーンヨーグルトに、缶詰のイチゴとオートミールとレーズンを添えて食べました。

祝福をして、手作りの軽食を味わいながら、その日一日の出来事を話し合いました。

「フラウ・マルコウさんは大丈夫だと思うよ」と、ヨーグルトを口に運ぶ合間に、ピーターソン長老が言いました。

「私もそう思う。ご主人が約束してくださったとおりにモルモン経を読み始めれば、きっとご夫婦でバプテスマを受けられると思うよ。」

「あすは、この近所はサッセ姉妹の所まで、残っているふたつの通りのチラシ配りを終えてしまおう。それから、新しい場所を探して、また配ろうか。」

「それがいいと思う。外に立ちっぱなしで、レッスンをひとつもせずに、日に5時間も6時間もチラシを配るなんて、新しい経験だからね。」私はそう答えました。

ふたりは使った大きなカップを洗って、服を着替え、ひざまずいて自分の祈りをしました。私は、翌朝すばらしい家族に出会ったら（家族を教えたいという目標がいつもあったのです）救いの計画についてよく準備した話ができるように、頭の中でひとつのレッスンをざっと復習しました。

それからベッドにもぐり込み、やがて眠りに就きました。11時頃です。電話の音にピーターソン長老が起こされました。

「クロムプ長老、起きて。あなたに電話です。伝道部長から。」

私は頭を一振りし、眠気を振り払って電話を取りました。

「クロムプ長老」伝道部長の声でした。「どう言ったらよいのか、言葉も見つからないのですが、実は先ほどあなたのお姉さんから電話がありました。お父さんがいましてが亡くなられたというのです。」

南ネバダのお兄さんの家にいるので、あすそちらの時刻で午後1時、お母さんと自分の所へ電話するように伝えてくださいとのことでした。

私にできることがあれば、どんなことでも遠慮せずいつでも連絡をください。」

私は返事もしどろもどろに、受話器を置きました。茫然として、暗やみの中、自分の靴につまづきながら、小さな台所へ向かいました。その小窓から、明るく輝く星を見つめました。

今聞いた話は、夢ではないか。自分に問いました。ほおをつたって落ちる冷たい涙の感触は、自分が目覚めていることを教え、父のその話が絵空事ではなかったことを思い知らせました。夢を見ていたのではなかった。あんな夢は金輪際見たことなどなかった。なのに、それが本当だとは！

そんなはずはない。父さんはいつもあんなに元気で丈夫だった！一度発作でしばらく体がマヒするまでは、健康のものだった。友達の父さんたちに比べればかなり年をとっていたけれど、ぼくが大きくなるまでずっと元気だった。ドイツに出発するときだって、空港ではぼくをがっちり抱きしめて涙も見せなかったじゃないか。3人息子の末っ子のぼくが天父のために伝道に出るといので、ぼくを誇りにしていたじゃないか。自分の伝道の話をして、できる限り最高の宣教師になるように準備しなさいと教えてくれたじゃないか。その父がなぜこんなことに？ そんなはずはない。

父さん、まだそばにいてほしい。ぼくはまだ父さんの子供です。なすべきことを教えてほしい、父さん。私は小さな窓から夜空の星を見つめてそう思いました。父さん、オリオンとスバルをぼくに初めて教えてくれたのはあなたでした。覚えていますか。ほら、見て、あそこを。……北斗七星が見えました。北極星も輝いていました。

天のお父様、どうか、父が今あなたと共にいて平安だと、わたしにわかるしるしを何か与えてください。父を心から愛しているのです。どうか、私を助けてください。

来もしない目に見えるしるしを待っている間、思い出がいっぱいに満ちて心がうずきました。ステーキ部長の部屋で、ふたりで神権指導者と会った日のいかに晴れがましかったことか。彼らが私を囲んで、父からメルケゼデク神権の長老に聖任されたときの、手の重みがよみがえってきました。

「リック長老」と、力を込めて握手をしたあとで、彼らは私に言ったのです。「あなたは必ずすばらしい宣教師になります。」

私は父の手を握り、そのうるんだ目を見つめたとき、父も私が立派な宣教師になると確信していたことがわかりました。

その記憶はそのまま薄れて、次に、勉強する予定を立てていたレッスンを心に浮かんできました。救いの計画の詳細が頭をよぎっていくにつれ、ほおの涙はしだいに乾いていきました。

私は前世と、天上の大会議のことを復習して、初めて、父がそこにいたことを実感しました。父はみんなと同じに、肉体を得てこの世に生まれ、期待されていたとおり、能力の限りを尽くして主の戒めに従いました。父ほどにいつも自分を二の次にした人を、私は知りません。気持ちは多くは語らない人でしたが、その行ないから、母や私たちを言葉以上に愛していることが、いつもわかっていました。

父ほど、家族との団らんを楽しみにした人はいません。父が家を空けるのは、ただひとつ、心から愛した福音のためだけでした。父のように教会で様々な役職をいただいて働いた人は、少ないと思います。私は父が第一の位と第二の位を立派に保って、天父との将来の生活を確か

に約束されていると感じました。

父が自分の両親や、50年以上も前に亡くなった幼い妹と再会している様子を、心に描きました。ちょうど伝道地での転勤のように次の働き場所へ移った父を、リュウおじさんやビッグおじさんも両腕を大きく広げて待っていてくれる様子が頭に浮かびました。

台所の小窓から外を見つめ続ける私にほほえみが浮かんできました。父がこれからどうするか、心配することはないと知ったのです。

しかし、母はどうだろう。40年も父と生活を共にしてきて、これから父なしでどうするのだろうか。

胸が締めつけられる思いでしたが、そのとき、今週中にもネバダ州のパナカでクロムプ家の集まりがあることを思い出しました。兄や姉たち4人全員が家族連れで母の所に集まり、傷心の母を助けようというのです。母がこれまで子供たちを慰め助けてきたように、今度は母を慰めるのです。それは当然のことです。母がひ弱でも無知でも無信仰でもないことはわかっていました。母は私がイエス・キリストの福音をよく理解し、愛するようには導いてくれましたが、その同じ真理の泉から、きっと力を得ることでしょう。

私はどれほどの時間、窓辺に立ちつくしていたでしょう。疲れのためにまぶたが重くなってきたとき、身じろぎもせずにいる自分を覚えています。私は、何か見えはしないか、すべてはよしと私に教えてくれる何かがないかと思いつつ窓の外に目を凝らしながら、背伸びをしました。その「しるし」が、平安で心を満たし、恐れを鎮め、故郷の家族とすぐ近くにおられる神とに対する愛で胸を温かくしたみたまの働きであったと私自身が知ったのは、それからしばらくあとのことでした。

やがて窓辺から立ち去るとき、自分は伝道の半ばで帰国してよいものかどうか

迷いました。すきに手をかけてから後ろを見ることや救い主よりも父母を愛することについての聖句を思い出しました。私に与えられた仕事を最後まで続けることを父は望んだらうとはっきりわかっていたのですが、でも私は、母にとって自分が必要なら、帰って母を助けようと決心しました。

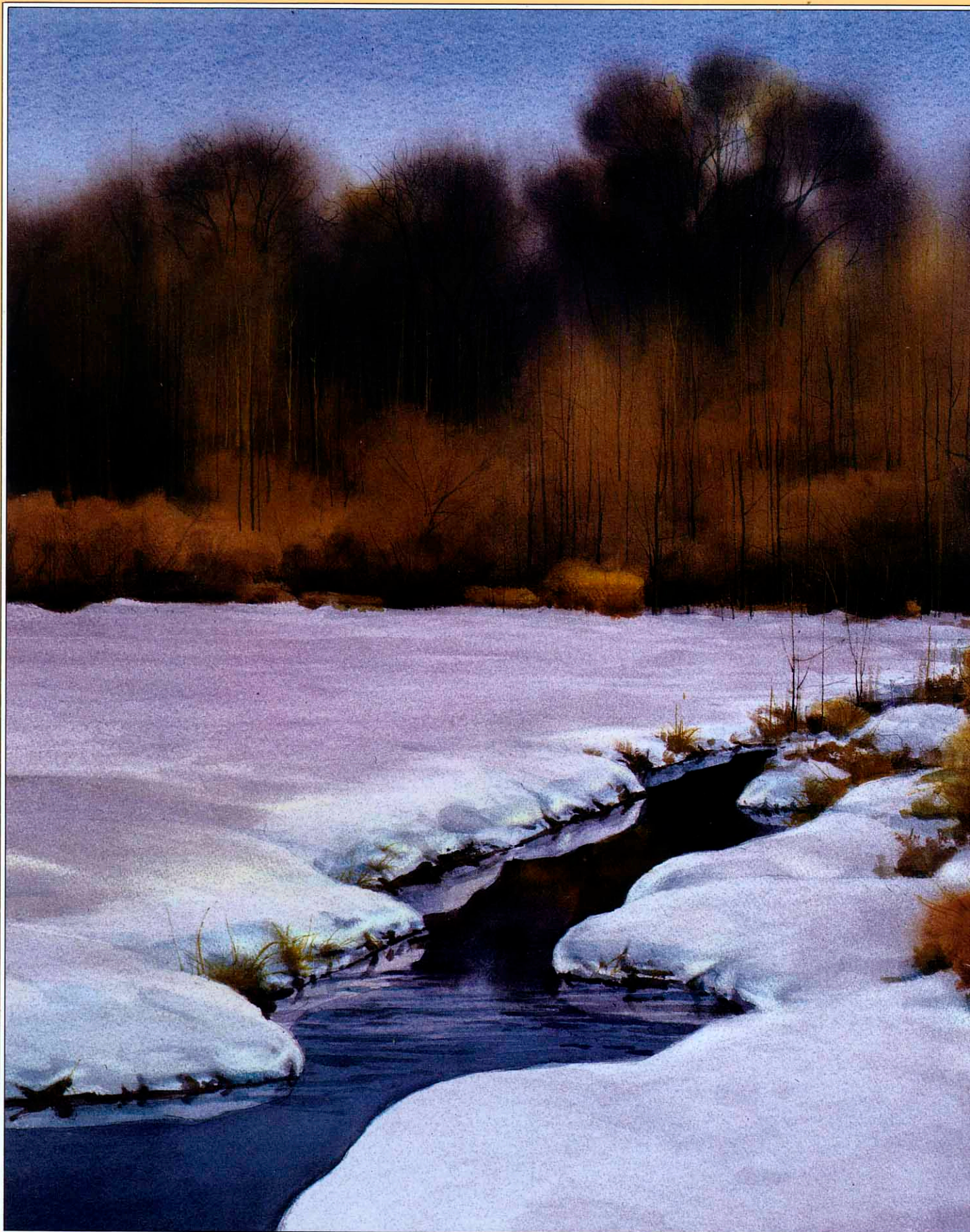
翌日、私はそうしたことをみな胸にたたんで、そのための支障はきたすまいと考えました。現に、父の死についてまだ実感はなかったのです。おぼろげな夢のようでした。けれども、家族に電話はするつもりでした。

午前中があわただしく過ぎ、手早く昼食を済ませてから、電話をかけるために、同僚とふたりで自転車で郵便局へ向かいました。長距離電話をはやる思いで待ち、やがて順番が来たので、デスクの向こうにいる人に電話番号を告げました。彼は建物の中央にある電話ボックスのひとつを指差しました。

「もしもし、ナンシー？ 聞こえますか。」電話がつながりました。

「はい、リック。電話ありがとうございます。みんな、いるよ。母さんは大丈夫です。心配は何もいらなくて伝えたかったの。母さんは、あなたに正しいと思うことをしてほしいって言ってます。」

母や家族と話をして、父の最期は家族のほとんどが駆けつけて、満足し、安心して逝ったと聞いたので、私が是非とも帰宅する必要はないことがわかりました。私は、神の予言者から与えられた仕事をするために、ドイツにいることを求められているのです。静かな細い声は私を慰め、私は伝道の残る任期を、自分の信念に添い、家族の、特に父の信条に従って全うすることができました。父は終わるまで忠実に忍耐して、私に同じようにせよと教えてくれました。父は仕事を完了する前に、やめたりあきらめたりしたでしょうか。そんなはずはないのです。



中央扶助協会会長会 カリキュラムの変更を発表

中 央扶助協会会長会は、1987年1月1日から実施されるカリキュラムの変更を発表した。この変更は扶助協会のプログラムをより簡潔に、またより柔軟性を備えたものとするために計画されたもので、全世界の姉妹たちの必要を満たすよう考慮されている。

「私たちは、今の時代に添うようにカリキュラムを変更しました」と中央扶助協会会長のバーバラ・W・ウインダー姉妹は語る。20カ国語で出版される予定の1987年度扶助協会テキスト「わたしに学びなさい」(PCRS58H5JA)は、以下の点で変更が加えられている。

1. 月に2度「霊的生活」のレッスンを行なうため、「霊的生活」のレッスンの数はこれまでの2倍に増加されている。レッスンには大管長会や十二使徒定員会の会員による説教が掲載されている。ウインダー姉妹によると、この変更は、ますます多様化しつつある今日の問題に対処できるようになされたものであるということである。「新しいテキストで、霊的な事柄がより強調されるようになり、今日の世界にはびこる悪から女性の皆さんが身を守る助けとなるよう願っています。」ウインダー姉妹はそう説明を加えている。

2. 「慈善奉仕」と「社会」がひとつの項目に入れられている。

3. 「母親教育」の項目が広義になり、「家庭教育」に変更された。これは様々な状況の下にある姉妹たちに大きな意味を持つものである。

4. 「教養」の項目は、すべての国に適したレッスンを作ることが困難なために削除された。

5. 毎月の「ホームメイキング」の集会時に行なわれる「家庭管理」のレッ

スは、個人と家族の備えに焦点が向けられている。

6. 特別レッスンでは、薬物濫用、ポルノグラフィ、墮胎など現代の私たちがかわる問題についてのレッスンが準備されている。このレッスンは第5日曜または必要に応じて行なわれる。

7. 今年度のテキストでは訪問教師メッセージは掲載されていない。訪問教師メッセージは、1987年2月号からの聖徒の道に掲載される予定である。大会号(1月号および7月号)については、訪問教師がそれぞれ大会説教の中から適切なメッセージを選ぶ。

8. 新しいテキストは、従来のサイズより小さくなっている。ウインダー姉妹はこれについて、「聖典を使って個人で勉強するのに、より便利になることと思います」と話している。

レッスン計画の柔軟性

新しいテキストには50のレッスンがあり、地元での必要に合わせるためレッスンの順序には柔軟性を持たせてある。ワード部または支部の指導者は毎月2回の「霊的生活」のレッスン、「家庭教育」「慈善奉仕/社会」のレッスンの順序を選択することができる。

教師の数は、監督または支部長と扶助協会会長とが、ユニットに所属する姉妹の人数や、教師を務めるにふさわしい姉妹の数などを考慮したうえで決定することができる。ひとりの姉妹がすべてのレッスンを教えることもできるし、5人の教師を召すこともできる。

また監督、支部長の許可を得て、週日に特別活動を行なうことができる。これは姉妹たちが集まり、子供のしつけ、文



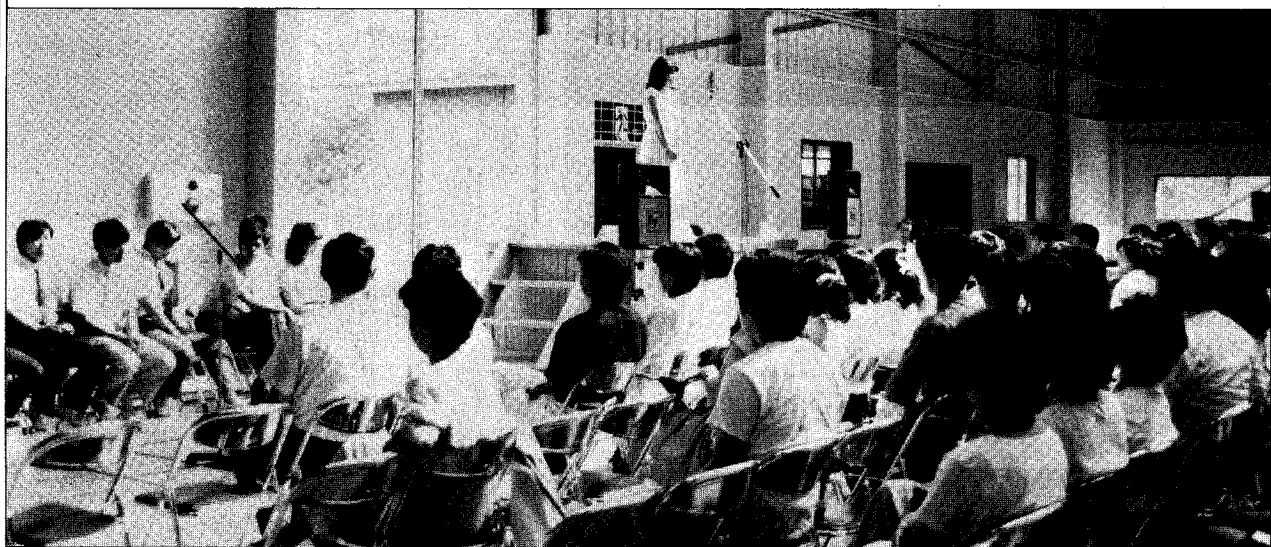
中央扶助協会会長
バーバラ・W・ウインダー

化的なトピック、手芸、そのほか興味深い題材について学ぶためのものである。この集会は月に一度あるいはそれ以上持つことができる。「この集会では過去の扶助協会のテキストや教会の機関誌など、教会が認可している教材を用いるべきです。」ウインダー姉妹はそう語る。この集会は、初等協会や若い女性の組織で働いており、扶助協会のレッスンを受ける機会のない姉妹たちのために用いることができる。

救い主を求める召し

1987年度テキストの表紙にある油絵はデル・パーソン作「マリヤとマルタ」で、イエス・キリストがマリヤとマルタを教えている場面が描かれている。(ルカ10:38-42参照)ウインダー姉妹は次のように語る。「この絵からは、私たちの生活にバランスがいかに必要であるかという力強く、簡潔なメッセージが伝わってきます。かつてなかったこのような時代において、女性は、困難を乗り越えるために内面の強さと霊性を増し加える必要があります。1987年度のテキスト「わたしに学びなさい」は、内面の強さを増し、霊性を高めるよう皆さんを導くものとなるでしょう。」

各地のたより



●独身成人サマーカンファレンスの最終日、一同に会して行なわれた証会(富士西湖パークの体育館にて)

東京・静岡地区6ステーク部合同 サマーカンファレンスに400人が参加

「Do it.(実行) 今、この時を越せ！」をテーマに、今年も緑豊かな富士の裾野、西湖のほとりで6ステーク部(静岡、横浜、東京、東京南、東京西、町田)合同の独身成人サマーカンファレンスが開催された。6ステーク部合同の大会は今年で2度目である。参加人数も去年を上回り、たくさんの兄弟姉妹が元気いっぱい顔をそろえて、大会の幕を開けることができた。手さぐりで準備が進められた昨年の合同大会とは打って変わって、今年も実行委員会、各ステーク部のスタッフともキャリア十分、「去年よりも良いものを」という意気込みが随所に見られた。実際どのプログラムも良く準備され、この1年間での一人一人の成長がうかがえるようなものばかりであった。

8月13日、昼過ぎには西湖入りした各ステーク部からの約400人の兄弟姉妹が体育館に一同に会し、開会式が始まった。会場が山梨とあって名将武田信玄にちなんだ時代劇風の脚本に「Do it」のテーマを込めてスキットが演じられた。兄弟姉妹の名演技や、駆けつけてくださった地区代表の浅間玄也長老のりりしい武将姿でのあいさつに拍手喝采が起るなど、楽しい開幕となった。それだけではなく、

これから始まる4日間、「人から何かしてもらおうことを期待するよりも、自分が周りの人のために何かしてあげよう」という決意を一人一人の胸に新たにさせる開会式であった。

夜には「広場の時間」が催された。各ユニットで準備した模擬店は、氷屋、駄菓子屋、クッキー屋などなつかしく楽しいものばかり。屋外ステージでは大会のテーマソングが演奏され、ダンスパーティーが始まるなど、静かな木々に囲まれた山の広場は一変してお祭り広場となり、にぎやかな夜となった。この日はまだ初

日、ほとんどが初めて会った人たちであるにもかかわらず、何年も前から友人であったような思いがするのは、そこに神様の愛のみ手があつて私たちを温かく包んでくださったからであろう。

2日目は、丸一日かけて「なるほど・ザ・タラント」が行なわれた。これはそれぞれの才能を伸ばそうという企画で、登山、テニス、手話、ダンス、合唱など13のコースが用意された。まるっきり初めてのものにチャレンジする人、普段から興味のあるものをより伸ばそうという人、才能を生かし先生として奉仕する人など様々であったが、どのコースも充実した一日となったようである。ある求道者の姉妹は、以前からやってみたく思っていた手話のクラスに出席したのをきっかけに、帰ってから地元の手話教室に通い、手話をマスターしたいとほりき



●開会式で、武田信玄にふんしてあいさつする地区代表の浅間玄也長老

各地のたより

っている。この一日をきっかけにテニスを始めた人、ダンスの練習を始めた人など、来年のカンファレンスでその成果が披露されることだろう。

2日目の夜は「ステージ・オン・ステージ」が舞台いっぱいに繰り広げられた。ここでも多くの兄弟姉妹の才能が披露された。特に渋谷ワード部のダンスは評判がよく、彼らのステージを見て、「自分たちだって」と心ひそかに闘志を燃やした人も多かったと聞く。このプログラムは去年も行なわれたが、今年は全体的にレベルが高く、その向上ぶりには目を見張るものがあり、神の息子、娘としての可能性を大いに感じることもできるステージであった。

3日目午前中は、これも恒例のセミナーが行なわれた。今年もたくさんのすばらしい講師をお招きし、各クラスとも熱心な授業が行なわれた。先生方の愛の込められた、また率直な意見やアドバイスに、伝道へ出る決意を新たにすることができた、日の光栄の結婚を絶対にしたいと思った、などの声が聞かれた。

この日午後からはまったくのフリータイム。会場は、青木の原の樹海の入口近くにあり、緑の木々、氷穴、目の前に広がる西湖と、自然に恵まれた所で、ドライブに出かける者もあれば、グループでゲームを始めたり、デートに出かけるふたり連れの様もあつた。それぞれが富士の裾野の自然を満喫し、たくさんの人との交友を深める機会となった。

そして夜はキャンプファイヤー。この大会もいよいよ大詰めである。星空こそ見えなかったが、木々に囲まれた夕やみの中で、赤々と燃えるたいまつを持ち、グループごとに入場する様は、まさに天の国を思い浮かべるような光景だった。静かに進められるスキットを見守りながら、また夜空に打ちあげられる色とりどりの花火を見あげながら、一人一人の胸の中には、3日間の楽しかった出来事が胸をよぎり、天のお父様の大きな愛を感じずにはいられなかったのではないだろうか。

最終日、今年の証会は全員が体育館に集まり、その証を分かち合うことができ

た。全員が集える場所がなく、分散して行なわれた昨年の証会と異なり、一同に会することができたのは、やはり大きな祝福であった。司会者の言葉と同時に何十人という人が席を立ち、長い列を作るのを見たときには、それだけで胸の熱くなる思いがした。一人一人の証は力強いものであったが、特に昨年求道者として参加していた兄弟姉妹が1年後に、力強く幸福そうな顔を輝かせて神様を証するのを見て、まさにこの世の奇跡を見ているような思いがした。また、今まで弱くなっていた自分がこの大会に来たことで励まされ、帰ってからは、ここで得た祝福をほかの人々にも分かち合えるよう頑張りたいという証も多く述べられた。

4日間を一言で言うならば、「夢のような」という言葉がぴったりとくるような大会であった。私たちがカンファレンス

から帰り、それぞれのユニットに戻って、大会で得た祝福と愛を多くの人々と分かち合えたとき、また自分自身の生活をより良いものとするのできたとき、「Do it. 今、この時を越せ！」のテーマは成就されるのではないかという気がする。

この1年間、自分の時間を犠牲にし、大会のために準備して下さった実行委員の方々、グループのためにその持てる才能と愛を駆使して働いて下さったグループリーダーの方々、参加するためにたくさんの犠牲を払い、共に集まって下さった一人一人の兄弟姉妹に心から感謝したい。また何よりもこのような大会を私たちに与えて下さり、4日間本当にたくさんの愛で見守って下さった天のお父様に感謝したい気持ちでいっぱいです。(レポーター：町田ステーク部厚木支部・矢野由紀子)

郡山地方部、盛岡地方部、仙台ステーク部合同サマーカンファレンスに180人が参加

1986年8月13-15日、岩手山国立青年自然の家で2泊3日にわたって東北6県の全全身成人を対象とした大会

が開かれました。大会委員長の藤村康男ステーク部長(仙台ステーク部)や、青柳弘一伝道部長(仙台伝道部)ら指導者

●サマーカンファレンス第2日目のディスカッションアワー(岩手山国立青年自然の家にて)



各地のたより



●セクラスに分かれて行なわれたセミナー。(左の写真は「結婚」のクラス)

をはじめ、180余人の兄弟姉妹が参加しました。

東北地方にステーキ部ができてから初めての合同大会ということで、準備の段階からすべてが未経験のことでした。まず、各地方部、ステーキ部の独身成人の代表が集まって中央実行委員会を組織し、また各ユニットごとに実行委員会を設けました。そしてプログラムの準備も分担制にしました。広い東北の各地に実行委員が散在しているため、中央実行委員会を開くのに各人の大きな犠牲が必要でした。それにもかかわらず「東北の若人一人一人が、燃えるような証を得ることができたら……」との思いが私たちを駆り立てました。

会期がお盆と重なったこともあり、参加が危ぶまれる人々もいましたが、たとえ一日だけでもという熱意を持った兄弟姉妹の参加に彼らの強い信仰を見ることができました。夜勤明けの状態のまま大会に合流してくださった兄弟、仕事の都合でまだだれも起き出さない午前4時に退所された姉妹、最後の証会のためだけにわざわざ遠路参加してくださった方々など、彼らの主に対する姿勢はすばらしいものでした。一方、自分の友達と一緒に参加された兄弟姉妹もいて、隣人愛を实践することによって、よい伝道の機会ともなりました。

日頃交流が少ない地方部とステーキ部の若人が一同に会したということで、ある程度の混乱が予想されましたが、15人のグループリーダーの兄弟たちと彼らを

支えた15人のサブリーダーの姉妹たちの献身的な働きにより、皆がひとつとなることができました。

盛岡地方部が担当した第1日目、紹介ゲームやウルトラクイズで楽しんだ後、夜はキャンプファイヤーでいくつかの支部やワード部の寸劇の発表やフォークダンスがあり、やみ夜に包まれたひとつの空間で幻想的なひとときを過ごしました。

仙台ステーキ部担当の第2日目、地方部長会やステーキ部長会、伝道部長会の役員の方々に講師として、伝道や結婚、神殿・系図、社会の中でのモルモンとしてのあり方など7つのクラスに分かれてセミナーがありました。特に藤村ステーキ部長は姉妹と共に、神殿結婚のすばらしさについて、また青柳伝道部長は宣教師の召しの神聖さについてレッスンされ、各クラスともみたまにあふれたセミナーで霊的な糧をたくさん得ることができました。

その後、約10キロの道のりの課題ハイキングでは、1歩間違えると自衛隊の演習場に入ってしまうというコースに各グループが一丸となって取り組みました。途中、期せずして大粒の雨が降り、立ち往生しましたが、実行委員がひざまずいて祈ると主の祝福により雨は上がり、ひとりの事故もなく終えることができました。

くたくたになったその夜は、日頃気になっているものの、なかなか話し合う機会がないことをテーマに取りあげ、ディスカッションアワーとして本音でぶつかり合い、白熱した討議を交わしました。

郡山地方部担当の第3日目は大会を締めくくる証会でした。青年の家の講堂には、みたまが共にあって、この大会で得た証をみんなで分かち合いました。「ぼくは伝道に出ます」と宣言された兄弟、「神様は確かに生きておられます」と涙ながらに話される姉妹、「この大会が終わっても私たちはいつまでも同じグループの仲間です」と言われたグループリーダー。だれもが、主から与えられた祝福に感謝いたしました。皆の証のあとに藤村ステーキ部長が、18年前にご自身がまだ求道者だった頃、東京でペンソン長老をお迎えして行なわれた独身成人全国大会のことを振り返り、「この大会が皆さんにとっての出発です」とお話しされました。最後に青柳伝道部長が話され、若いときに行なうべき4つのこととして、①高い学問を身につけること、②伝道に出ること、③神殿結婚をすること、④生涯喜んずることのできる仕事に就くこと、をメッセージとして頂きました。

大会を通じ教会の外で福音を实践することの大切さについてよく知ることができました。青年の家に宿泊している人が全員参加する夕べの集いで、讃美歌「家庭の中に」を歌い、ほかの団体の方々にもよい気持ちを味わっていただくことができました。また、退所するとき、青年の家の職員の方の前で「神よまた逢うまで」を全員で合唱し、大変喜んでいただくことができました。

多くの兄弟姉妹が燃えるような証を持ち、伝道を、そして神殿結婚を決意しました。この大会のために各人が犠牲を払いましたが、主から受けた祝福はその幾倍もあり、個人の内面において多かれ少なかれ変化があった3日間でした。

この大会を行なうにあたり、実行委員の方々をはじめ、多くの方が全力で働いてくださったこと、また指導者の方々が最後までよくフォローしてくださったこと、そしていつも主がそばにいらして必要な助けと導き、励ましを与えてくださったことに心から感謝いたします。(レポーター：サマーカンファレンス実行委員長・渡辺健二)

発団10周年 記念野営 開く

ボーイスカウト
名古屋第89団

●森の中で行なわれた安息日の3時間プログラム（岐阜県大野郡朝日村の子の原高原にて）



中 中央地方部のわずかな教会員の子弟で始めたボーイスカウト活動も、早10年を迎えました。その間にこの地の教会は、ステーキ部が組織され（1978年）、さらにふたつに分割され（1980年）、教会堂がいくつも建設されて成長してきました。名古屋第89団も、着実に人数が増え、リーダーも経験を積み、父兄、神権指導者もよく理解してくださるようになっていきます。中でも特筆すべきは、発団当時から中心的役割を果たしてこられた池田茂美兄弟（名東北ワード部副監督）が、地区の副コミッショナーに任命されたことです。

さて、夏には例年、カブ（小3～小5）、ボーイ（小6～中3）、シニア（高1～高3）それぞれが別個の活動をするのですが、今年は10周年を記念して、全員で岐阜県大野郡朝日村の子の原高原へ出かけました。参加したのは、スカウト40人、指導者、奉仕者、スカウトの弟妹など35人、計75人という大世帯。輸送、宿泊、炊事、プログラムの展開などで、何度も打ち合わせをして当日を迎えました。

8月2日、文字どおり「遠き山に日は落ちて」からボーイスカウトらしく大営火（キャンプファイヤー）を囲んで開会式を始めました。団委員長のあいさつ、各組、班の寸劇の発表の後、老若男女入り乱れてのゲームです。創立者ヘーデ

ル・パウエルの言った「スカウトはみな兄弟」を身をもって体得しました。締めくくりに静かに「夜話」を聞き、夜の静寂の中へ戻っていきました。

乗鞍岳の中腹で、標高1,500メートルもあるだけに日が暮れると空気が急に冷たくなって、営火の暖かさがうれしく感じられました。やみと光、冷気と熱、静けさと大騒ぎの混じり合った、印象深い夜でした。

その後も気温は下がり続けたため、翌朝になって「夜中の3時から寒くて寝られなかった」と何人もが訴えていました。この日は安息日だったので、前もって決めておいた「思索の森」へ、ジョセフ・スミスのように入り込んで行きました。木の葉の間から柔らかい光が差し込む森の中で、初等協会、扶助協会、神権会、日曜学校、聖餐会を開きました。非教会員のご父兄の方々にとっても感銘の深い3時間でした。

それからの2日半は、各々の隊が独自のプログラムを展開します。カブの子供たちは、草原に仰向けに寝て星を観察したこと、宝探し、自作のゴム鉄砲を作った「狩り」などのいろいろな活動をしました。一番良かったのは、近くの塩沢温泉の大きな湯舟だったそうです。

ボーイ隊は、主力の班長、次長4人が全日本ジャンボリーに出席して不在でし

た。周到的準備をしたものの、果たして小6から中2までの少年たちに3,000メートルの乗鞍岳登山ができるか、大いに心配していました。午前3時半、隊長を先頭に出発したところ、間もなく天候が急変しました。ちょうど台風が接近中だったのです。隊長は「勇気ある撤退」を命じました。テントに戻った少年たちは、隊長たちの運転する自動車に分乗し直して楽しくドライブをしながら乗鞍へ登ったのでした。

登山は空振りに終わりましたが、班長、次長の不在を年少のスカウトがリーダーシップをよく発揮して、立派に野営生活ができたのは、大きな収穫でした。

その間、高1のシニアスカウトふたりは、名古屋までの150キロの行程を自転車走破していました。テント、寝袋、炊具などを積んでの道中は、雨や6回にもわたるバンクなどなかなか大変だったようですが、企画、計画、実施をふたりでやり遂げたので、大いに満足しています。

10周年記念野営を通じて、それぞれが成長して帰ってきました。次の10年がたてば同じ釜の飯を食べた彼らが、監督会やステーキ部の神権役員として一緒に働くようになっていくことでしょう。（レポーター：団委員長、名古屋ステーキ部高等評議員・中井宗雄）



世界的な音楽家 弘中ご夫婦の改宗

去る5月4日(日)と24日(土)に、多くの兄弟姉妹が待ち望んでいた、弘中兄弟姉妹のバプテスマ会が開かれました。弘中兄弟は東京音楽大学の教授、ピアニストとして、弘中姉妹は久保陽子(久保は弘中姉妹の旧姓)という名のバイオリニストとして、それぞれにすばらしい活躍をしていらっしゃる方々です。

おふたりが改宗されるまでの軌跡には、すべての人の改宗がそうであるように、いくつかのすばらしいドラマがありました。改宗に至る最初のきっかけとなったのは、弘中姉妹のご両親であられる久保兄弟姉妹でした。久保兄弟と姉妹は今から11年前、カトリック教会の根強い奄美大島でこの教会のバプテスマをお受けになりました。それまでのおふたりはカトリック教会の熱心な信者でした。末日聖徒イエス・キリスト教会に改宗され、否定することのできない強い証を持たれた久保兄弟と姉妹が第一に始められたことは、すでに結婚されて東京で暮らしてお

られた弘中兄弟姉妹に福音を伝えることでした。教会の出版物を送るなど様々な方法で行なわれた伝道でしたが、残念ながら当時、弘中兄弟姉妹はあまり関心を示されなかったようです。しかしなお久保兄弟姉妹の努力は根気強く続けられました。

数年前から、久保兄弟姉妹とお知り合いだった渡辺^{かん}兄弟(東京神殿の第一副神殿長)と念垣兄弟が、弘中家族をたびたび訪問されるようになりました。そのような中で、姉妹はご自分から進んで福音を学ぼうという姿勢を持たれるようになりました。しかし弘中兄弟の心が開かれるにはまだ数年の歳月が必要でした。

弘中兄弟の心にひっかかっていたものは、何だったのでしょう。弘中兄弟は当時を振り返って、「それは一種の反発心だったようです」と言われます。弘中兄弟は久保姉妹と結婚をされる時、カトリックの洗礼を受けるように久保兄弟姉妹から勧められ、お受けになりました。そ

●弘中孝兄弟(ピアニスト)

6歳よりピアノを始める。1961年音楽コンクール第1位特賞ならびに安宅賞、翌年第1回バン・クライバーン国際ピアノコンクールに日本代表として参加し入賞。1963-65年フルブライト給費留学生としてジュリアード音楽院に留学。1968年第1回シフラ国際コンクール第1位金賞、1969年ロン・ティボー国際コンクールで第4位入賞。海外への演奏旅行もしばしば行ない、ソロおよびバイオリニストの久保陽子姉妹との二重奏により、ソ連、ヨーロッパ各地を歴訪。現在、我が国の最も充実したピアニストのひとりとして、リサイタル、オーケストラとの共演、室内楽での活動と多方面にわたり活躍している。

●久保(弘中)陽子姉妹 (バイオリニスト)

3歳の頃より父にバイオリンの手ほどきを受ける。1960年第29回日本音楽コンクール第2位入賞、1962年チャイコフスキー国際コンクール第3位入賞。1963年フランス政府給費留学生としてパリに留学。1964年バガニー国際コンクール第2位入賞、1967年クルチ国際コンクール第1位入賞など国際舞台で数多く受賞。現在リサイタルおよび、N響、読響、大フィルなどと協演し好評を博している。

れほどまでにカトリックに熱心だった久保兄弟と姉妹が、末日聖徒に改宗し、今度はその教えを勧めようとなっている。一体自分は何を信じたらいいのか、そのようなことから反発する気持ちをめぐいきれなかったようです。

一方、弘中姉妹は次第に証を強められ、すぐにでもバプテスマを受けたいという強い気持ちを持たれるようになりました。しかし、兄弟の気持ちを尊重され、バプテスマを受けることを控えておられました。この間姉妹は、次のような気持ちを抱いておられたと言っています。「自分はバプテスマを受けていないので、聖霊の賜を受けることはできない。それでも自分は末日聖徒だという自負がある。自分が教会員としての信仰を持ち続け、行動するならば、神様はきっと必要な導きを自分にも家族にも与えてくださるに違いない。」家族の中では教会の話をするのがタブーであるような時期が続く中、弘中姉妹は忍耐されました。

各地のたより



●弘中孝兄弟のバプテスマ会。(五月二十四日、町田ステーク部センターにて) 左から久保芳子姉妹、弘中陽子姉妹、量兄弟、弘中孝兄弟、久保信義兄弟、信夫兄弟

約束があったからというだけではなく、ちょうど約束の1年を過ぎる頃から、信仰というものがなければ人生を歩んでいくことが困難だということを思い知らされるような出来事が、次々と起こってきたからです。この気持ちの変化は私にとって奇跡でした。今の私には信仰は不可欠なものになりました。

私自身、まだまだ弱い人間です。モルモン経にあるように、鉄の棒にしっかりとつかまっていなければ、暗黒の霧は容易に私たちを神様から遠ざけてしまいます。鉄の棒につかまっていることの大切さを痛感しています。そして私の改宗のきっかけを作ってくれた息子に心から感謝しています。また多くの方々に感謝しています。」

また久保兄弟姉妹は「11年間、それこそ文字どおりに毎日、この日のことを祈り続けてきました」と、語っています。この言葉に象徴されるように弘中兄弟姉妹の改宗には、ご家族をはじめ多くの兄弟姉妹の信仰と祈りがあったことを強く感じずにはおられません。

現在、弘中兄弟はメルケゼデク神権を受けるために準備をしていらっしゃいます。また、ご家族の次の目標は神殿参入です。これから先、おふたりが模範的なクリスチャンとして、また末日聖徒の音楽家としてさらにご活躍されますように心からお祈りしたいと思います。(レポーター：横浜ステーク部川崎ワード部伝道主任・相浦真範)

そのような状況の中でも明るいニュースがありました。1983年9月8日にご両親に先立って息子の弘中量兄弟(10歳)がバプテスマを受けられたのです。久保兄弟姉妹が蒔かれ、渡辺兄弟たちが育てておられた福音の種がこのような形で芽ばえ始めたのです。その後、教会に元気に集う量兄弟の姿を目にすることができるようになりました。そして、お父さんの弘中兄弟の改宗にこの量兄弟が大きな影響を与えることになったのです。

1985年の春、量兄弟は中学校入学を前にして、彼が習っているバイオリンのレッスンについてご両親の弘中兄弟姉妹と話をしていました。量兄弟にとってこれから本格的にバイオリンをやっていくためには、それまでよりもさらに一層の覚悟をし、練習を積まなければなりません。ご両親が彼の決心を確かめたとき、彼はお父さんに向かって次のように言いました。「ぼくが本気でバイオリンの練習をしたら、その代わりにお父さんは教会のことをまじめに勉強してくれる? ぼく本気でバイオリン練習するよ。」これは彼にとって思わず口をついて出た言葉でした。「よし、それは男と男の約束だからな。お前が1年間バイオリンの練習に打ち込んだら、お父さんも真剣に教会のことを勉強しよう。」弘中兄弟は答えました。

このときから約束の履行のために量兄弟の努力が始まりました。彼は毎朝3時か4時には起きてバイオリンの練習を始め、平日には4時間ぐらい、休みの日に

は6時間ぐらいの練習をこなしていきました。彼はこれをご両親から言われてやったのではなく、毎日自発的に続けたのです。

この量兄弟の行ないによる模範は、お父さんの心を動かししました。約束の1年が過ぎようとする今年の春から、いよいよ弘中ご家族は家族みんなで教会に集われるようになりました。再度レッスンが行なわれ、間もなくおふたりはバプテスマの水をくぐられたのです。奄美大島からわざわざ来られた久保兄弟姉妹もお迎えして行なわれたバプテスマ会は、言葉ではとても言い表わせないほどの霊的な雰囲気包まれていました。

この会で、弘中兄弟は次のように証されました。「私が『教会に行かなければ』と思うようになったのは、単に息子との



私の家族の改宗 —3代続いたカトリックの信仰から末日聖徒に—

鹿児島地方部名瀬支部 久保 芳子

19 86年5月は私のこれまでの生涯で最大の喜びの月となりました。それはひたすら祈って待ち続けた、娘夫婦のバプテスマが11年目に成就したからです。娘陽子(弘中)から電話でその日が

5月4日に決まったと知らせがありました。

少し前、鹿児島地方部で5月初めの連休に神殿参入する人たちを募っていました。私たち夫婦も申し込んでありました。

各地のたより

4月30日の朝、名瀬を発ち、夕方神殿宿舎に到着、翌朝より、3日間で14回のセッションを終え、身も心も清められて、夕方弘中宅へ着きました。

娘夫婦の間には息子（量）がいて、この子は小さいときから、天のお父さまが大好きでした。親に先がけて10歳のときバプテスマを受け、今はアロン神権者としてよき模範を示しています。

夫と私は先祖3代にわたるカトリックの信仰を守り、戦争中、軍部からの言うに言われぬ迫害に耐え抜いた家系でもあるのです。カトリック教会こそ唯一の宗教と信じてきましたが、それなのにいつからかカトリックの中であって、何かわからぬ寂しさを覚えるようになり、なぜだろうと考えるのでした。そして私は神の真理がわかっていないことに気づいたので。「神様、どこへ行けば求められるのでしょうか。永遠に変わらぬ神の真理が欲しいのです。それを私にください。その代わり、この世のお金、財産、地位、名誉、そのようなものは何もいりません。神様が真理を私にお与えくださればそれを親からの唯一の遺産として、愛するふたりの子供に伝えたいのです。」

熱心な祈りが一年ほど続きました。待っているだけではだめだと思い、私たちは日本でのカトリック教会の総本山（上智大学のあるところ）であるイエズス会の神父の教えを請うため、主人と相談の結果、当時3年生の息子信夫（姉陽子が23歳のとき生まれた）を連れて上京するばかりに準備が整っていました。

ふたりのモルモンの宣教師が私どもの店の前に立ったのはその頃のことです。私のところへ歩いてきて黙って顔を見ました。第一声が「私はどんなことがあっても、あなたに私のメッセージを伝えなければなりません」という言葉でした。その真剣な目に何も言えなくなり、ジョセフ・スミスの見神の話をかされたのです。彼らは翌朝9時にやって来て、「店、落ち着きません。静かなオザシキありませんか」と言うのです。「二階にはあるのですが……」と、答えると同時に靴を脱いでトントンと上がって行ったのです。私は驚いて上がってみると、テーブ

ルの上に聖書とモルモン経を開いてふたりが正座して待っていました。私は聖書しか信じていませんでした。ところが驚いたことにモルモン経の出現がイザヤ書に予言されているではありませんか。それからこのふたつの書を突き合わせての勉強が始まったのです。学ぶうちにモルモン経がとても好きになりました。

宣教師は毎朝9時きっかりにやって来ます。私は天にも昇るような喜びを覚えました。そしてある日、「あなたのバプテスマの日をいつに決めたらよいですか？」と聞かれ、考えたこともなかった私は、「洗礼は一生に一度のもの、私はすでに受けています」と答えました。それについて宣教師から説明があり、それを受け入れました。それから眠れぬ夜が続いたのです。「神様！ 先祖代々恩を受けたカトリックを捨て去ってもよいのでしょうか？」夜明け近くまで問い続けました。ある夜、地震の地鳴りとともに「バプテスマを受けよ！」というみたまの声に胸を差し貫かれたのです。主人もそのときみたまを受けており、あれだけ、許さん！と憤っていたのに「何もわからずして反対はできないだろう。自分も勉強

してみよう」と、主人の方がかえって一生懸命になってくれました。

私たちは9歳の信夫と共に奄美の美しい海でバプテスマを受け、主の教会の群れに加わったのです。この喜びを愛する娘家族に……と、信夫も含め家族ぐるみの熱心な祈りが始まったのです。それから11年目、やっとこの願いが天に聞き入れられました。娘だけならもっと早くバプテスマを受けられたと思いますが、渡辺驩兄弟から「彼ひとりだけ残したらいけません。待ちなさい、待ちなさい」とアドバイスを受け、その言葉に従いました。

そしてついに孝が、神が真実実在のお方で生きてましますことを知ったのです。神との出会いは一人一人その時期も方法も違います。娘夫婦にとっては今年の春がその時期であったと思います。婚孝は今初めて神を知ったばかりで、柔らかい双葉が出かかったところです。信仰はこれから育てていかなければなりません。

この教会は真実です。神様は生きておられ、私たちの祈りに応えてくださることを証します。（くぼ・よしこ 1922年生まれ、名瀬支部初等協会会長）



奄美大島からのたより

名瀬支部(鹿児島地方部)の紹介

名瀬支部支部長 久保 信義

鹿 児島地方部名瀬支部は、九州本土と琉球沖縄の中間に位置する奄美大島という小さな美しい島にあります。島の中心地である名瀬市は人口5万を有する島唯一の都会です。昭和46年5月7日に伝道所が開設され、2年後には付属支部、54年に独立支部となり現在に至っています。初代支部長には川島俊男兄弟が召され、やがて私がその後を継いで2代目の支部長に召されました。現在40人ほどの熱心な会員が活発に集っています。昔奄美は琉球王国の統治下にあり、琉

球王国から派遣されたノロ神（女神）によって島の政治は司どられていました。またそのほかにユタ神というのがあり、おもに運勢、占い、霊の媒介などを行なうという信仰がありました。明治30年頃、フランスから神父が来島し、カトリックの教えを布教しました。その勢力は約100年の間に全島を風靡し、至る所に優美な鐘楼を有する教会堂が建てられました。朝夕鐘が鳴り響いて、信者1万人を擁する奄美大島は第2の長崎と言われるほどです。私の久保家と妻の岡崎家は3代に

各地のたより

わたる熱心なカトリック信者でした。

今から11年前の1975年3月21日、私たち親子3人（妻良子と長男信夫）は島のきれいな海でバプテスマを受けました。当然親戚からは異端者扱いされ、村八分の状態となりました。当時私はカトリックの教会の中で重要なポストにあり、あらゆる仕事を取り仕切っていましたのでいろいろなトラブルがありました。親戚や熱心なカトリックの信者たちは、私たち家族が離教したのは一時の迷いと考え、すぐに復帰するようにと私たちのために祈っていたようです。

末日聖徒イエス・キリスト教会に改宗して11年、私たちがますます喜びに満たされた生活をしているのを見て信仰が本物であることを知り、私たちに対する不信感と軽蔑視もだんだん薄れてきつつあります。末日聖徒の教会の話ができる日も近いように思われます。彼らもキリスト教徒ですから理解は早いと思います。

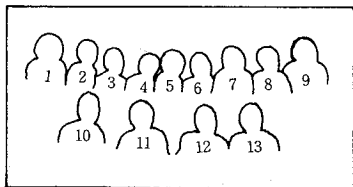


●名瀬支部：〒894 鹿児島県名瀬市伊津部町27-3 ☎09975(2)2725

かつてメキシコのカトリック教徒が教会ぐるみで改宗へと導かれたと聞いています。これから奄美の会員たちの模範と伝道の努力によってメキシコで起こったことがあり得ると信じます。

名瀬支部のもうひとつの願いは、教会堂の建設です。敷地はすでに購入されています。もう一息一致団結して、この業が早められますよう祈っています。（くぼ・しんぎ 1915年生まれ）

8月に召された JMTC第87期生 13名の名簿



S：ステーキ部，D：地方部
W：ワード部，B：支部



〈名前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉	〈名前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 小島 初子	東京南S / 渋谷W	大阪伝道部	8. 富樫 公枝	盛岡D / 秋田B	東京南伝道部
2. 仲岡 久子	高松S / 八幡浜B	名古屋伝道部	9. 小林 秀江	札幌M / 函館B	名古屋伝道部
3. 村川 淳子	福知山D / 彦根B	東京北伝道部	10. 貞国 康之	大阪S / 阿部野W	名古屋伝道部
4. 山下 博美	岡山S / 福山B	東京北伝道部	11. 中野 博史	高松S / 徳島W	札幌伝道部
5. 菊地多佳子	仙台S / 石巻B	札幌伝道部	12. 狗巻 孝	大阪堺S / 三国ヶ丘W	札幌伝道部
6. 加藤 映子	名古屋S / 春日井B	札幌伝道部	13. 山梨 政広	東京西S / 八王子W	神戸伝道部
7. 関 真由美	東京西S / 国立W	札幌伝道部			

私と親族23人の改宗

——「50年間、プロテスタント教会の会員でした」——

韓国ソウルステークス部ステークス部長 **崔 東憲**

私 は1924年10月30日、ソウルより約90キロ離れた小さな村で生まれました。当時父親は村の小学校の校長で、長老派に属する村の教会の伝道師でもありました。ですから私は幼いときから、キリスト教家族の一員として生活し、もちろんその教会の幼児洗礼も受けていました。

私が20歳であった頃の日本は、植民地であった朝鮮の青年たちを皆、軍に徴兵していました。私も日本海軍に入隊して、東京海軍経理学校で練習生過程を終えました。その当時、私は賀川豊彦著「死線を越えて」を非常に感銘深く読んでいて、東京に滞在中2、3度その作家の家を訪問するほどの熱心なクリスチャン青年でした。

戦後復員して、韓国の海軍士官学校を経て、4年余りの海軍将校生活中にも、兵営内の教会の役員としてかなり熱心に務めていました。ところが社会に出て事業に夢中になっていた30代から40代にかけての私は、まったく教会から離れた生活を送っていました。

1946年12月に結婚した妻との間に2男

5女を得ました。末の子供が14歳になる頃から、10年余り眠っていた私の信仰心が、そろそろと目覚めるようになりました。それは、いつの間にか母が娘3人と共にカトリックに改宗して、子供たちは皆プロテスタントの様々な教派にそれぞれ通っていたからです。せっかく家族一同が食卓を囲んでも、話題は自然と自分が属している教会のことにになり、まるで全国のキリスト教分派が皆私の家庭に集って言い争っているような有様でした。私はついに「これではいかん、何とか家族全員をひとつの教会に通うように統一しなければ」と考えるようになりました。

ちょうどそのとき、末の子が末日聖徒イエス・キリスト教会の会員になりました。私はそれまでカトリックとかプロテスタントのいろいろな教派の教会には、たびたび行ったことがありましたが、末日聖徒イエス・キリスト教会にはまだ一度も行ったことがありませんでした。それに牧師をしている友達からモルモン教は異端教派だと強く言われていたので、当時の私は末日聖徒イエス・キリスト教会に対してあまりよい印象は持っていま

せんでした。しかし一番かわいい末っ子がそれほど熱心になっている教会は一体どんなところなんだろうかと関心を持つようになって、一度訪問してみたい気持ちになりました。

私が初めて訪問した教会は当時のソウルワード部だったのですが、私はたった一度の訪問で言うに言われぬ感動を覚え、そのとき受けた驚きは並大抵のものではありませんでした。それは、私がおよそ50年間という長い信仰生活の間、プロテスタントのあいまいな教義に抱いていた疑問の多くが一瞬に正確明瞭に解決できるような瞬間でした。私は宣教師のレッスンに熱心になるばかりでなく、安息日には一度も欠かさず熱心に教会に集いました。またモルモン経と教義と聖約はもちろん、韓国語に翻訳された教会の本はほとんどみな読みました。その当時の私の喜びは、筆舌に尽くしがたいものでした。これまで長い間求めて知り得なかった真実の教義と真実の教会をついに見いだせたからです。

1973年12月1日、私は長男と妻と共に、3人そろってバプテスマを受けました。「見よ、われは民に証し民を警めんため汝らを遣わせり。されば、その警めを受けしことあるすべての人はその隣人を警むる責任あり。」(教義と聖約88:81)この聖句を目にして、私はじっとしていられませんでした。真実の教会の会員になった以上、まず私の身近な人たちから改宗させなければなりません。もうすでに20年間もカトリックの信仰を堅持している母や姉たち、それから仏教信者の義兄など、初めのうちは非常にむづかしいことでしたが、私は真心を込めて私の証を兄弟姉妹、それから親戚の人たちに伝えましたので、皆よく理解してくれました。そしてついに身内の者から近い親戚の23人が皆バプテスマを受けました。これは私がバプテスマを受けてから約10カ月の間に起きた出来事です。

それからが一大事でした。当時私たちが住んでいた上峽洞という町と、ワード部がある龍頭洞町とは約15キロほど離れた所であって、バスで約45分ぐらいかかりました。当時日曜学校は昼間に、聖餐

●崔夫妻(中央)。ふたりの息子さん夫妻とハワイ神殿長と共に



各地のたより

会は夜間にあり、幼い子供たちや年離れた者が安息日にこれほど遠い所を2回往復するのはとても困難なことでした。

それで私はステーキ部長の許可を得て、私の家で集会をするようになりました。会員がますます増えて40人になった1975年5月、支部が組織され、私は支部長に召されました。こうして私の家族と親戚たちを中心として始まった支部は、その後ワード部になり、それも分割されてまたもうひとつのワード部が組織され、今はふたつのワード部で575人の会員を擁するまでに増えました。

私は1978年4月にソウルステーキ部の第一副ステーキ部長に召されて奉仕していましたが、1979年4月に東ステーキ部が増設され、東ステーキ部の第一副ステーキ部長に召されました。その後1980年7月に私はソウル西伝道部の管轄区内に引っ越し、教会は12人が出席する伝道部直轄の小さな支部に集いました。引っ越してすぐに、伝道部長よりその支部長に召されました。支部長に召された翌日から宣教師たちを助けて1年に100人の改宗者を得ることができ、1982年9月には211人の会員を擁する堂々たるワード部に成長しました。

私はこの真実の教会に入って、本当にたくさんの祝福を受けました。子供たちは皆伝道に出て、任期を終えてからは、神殿結婚をして永遠に結び固められました。昇栄へ向かって一步一步前進しているようで本当に幸福に思っています。

私はいつも予言者の言われるとおりに生活すれば、必ずたくさんの祝福が頂けるという固い証を持っています。

私は50年もの長い間プロテスタント教会の会員でしたが、神様が前世での立派な霊を私の末の子として送ってくださり、その子供を通してこの真実の教会に出会えるようにしていただきました恩恵に感謝しています。

今韓国には800万人のプロテスタントの会員、そのほかカトリックや様々の宗教の方々があります。彼らを真実の教会に導く責任は、実に私たちにありと痛感しています。老衰し、力が尽きるまで、私はこの道に精進する覚悟です。(1924年生まれ)

マイスクールの 子供たち⑤

●後列左よりニ森長老、マーリー長老、藤谷兄弟、島谷信子姉妹、淳子姉妹

島 谷信子姉妹、淳子姉妹がマイ・スクールに初めて参加したのは、去年の9月でした。中学1年生のお兄さんについて来るようになったのです。

ふたりがバプテスマを受けたいと私の家の玄関で瞳を輝かせて申し入れたのは、今年の5月2日のことでした。すぐに長老たちとのレッスンに入り、1カ月後の6月1日に、支部の兄弟姉妹たちの見守る中、種子川でバプテスマを受けました。信子姉妹はマーリー長老から、淳子姉妹は私の主人からバプテスマを受けました。清流でふたりは再び生まれたのです。

このふたりの美しい姉妹たちは、朝4時半に起きて魚市場のお手伝いに行き、家計を助けています。マイスクールのことがテレビに出て以来、市場の方々も我が家に対しても好意を寄せてくださり、淳子姉妹は自分の働きによって得たエビや魚などを、早朝プレゼントとしてくれたりするのです。週1回の夫の「お茶の間レッスン」にも欠かさずふたりは参加しています。またふたりの従順さや主を愛する心が日々大きくなっていくのを見て、いつも主に感謝しています。

ふたりに、またほかの聖徒となったマイスクールの生徒たちに次の聖句を贈ります。神の聖徒たちに……。

「神の聖霊を悲しませてはいけない。あなたがたは、あがないの日のために、聖霊の証印を受けたのである。」(エペソ4:30)

主が生きてましまし、日々私たちを愛してくださっていることを証いたします。(高松ステーキ部新居浜支部セミナー教師・藤谷利恵子)



心の誕生日

高松ステーキ部新居浜支部
島谷 信子(12歳)

バプテスマを受けたのは、6月1日で、妹といっしょに受けました。バプテスマを受けるとき、たくさんの人々が参加してくださり、本当に神の子、教会の一員としてがんばろうという心になりました。そして、兄弟姉妹とも仲よく、気がるに話せるようになりました。とってもうれしいです。

バプテスマを受ける1カ月ぐらい前は、長老たちが、教会や私の家で、聖書のことやさばきのことなどについて教えてくれました。本当に感謝しています。

6月1日が「心の誕生日」となりました。兄弟姉妹たちは、誕生日がふたつあります。心の誕生日は心が1週間のうちに汚れてしまうので、安息日にパンと水をいただき、心をきれいにします。でもまたよごれてしまうので、何回もくり返し教会へ行きます。

教会では、聖書、モルモン経、きょうぎとせいやくを開け、兄弟姉妹たちのお話を聞きます。人それぞれ思っていることとお話します。感動すること、かわ

神の子となつて

高松ステーク部新居浜支部 島谷 淳子(10歳)

いそうながありますが、かわいそな話を聞くと、本当にその人を助けてあげたいと思います。 苦しんでいる人、悲しんでいる人のことをいのります。 教会はイエス・キリストのことを学ぶ

だけでなく、人の気持ちのことも学ぶということがわかり、とってもうれしいです。(しまたに・のぶこ)



私 が長老たちと出会ったのは、お兄ちゃんがマイスクールに行っていて、私とお姉ちゃんが、お兄ちゃんについて行ったときです。私とお姉ちゃんがバプテスマを受ける決心をしたとき、長老がわざわざ私の家に来て、1カ月レッスンをしてくださいました。長老たちにとっても感謝しています。

6月1日、バプテスマを受けた日、天気がよく晴れていて、教会の人たちがたくさん来てくださいました。川の水は冷たかったけれど、本当に神の子になったと思います。教会の人たちはとてもいい人たちです。プライマリーの先生も親切です。私は好きです。マイスクールに行くのは、とてもたのしいです。藤谷兄弟が毎週水曜日に聖書の勉強室に呼んでくれます。神様のことがよくわかります。

私の好きな聖句を最後に書きます。 マタイ5章3節「こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。」(しまたに・じゅんこ)



明日の神の子供たち

<5>

マンスクールに仲良しの三人兄妹が通っている。中学一年のよの君(三を頭)、小学五年のぶち(二)、四年の順ちゃん(一)の姉妹。母子家庭で、母親(三)は建設会社で働いていた。その会社が暮れも押し詰まった去年十二月九日、倒産した。「あしたから生活はまるまるおまかせ」です。仕事が見つかるまでか。三人の手と足は不安定に話し合っていた。が、大黒柱の母親は胸を張った。「大丈夫、心配せんでええよ」。そして、母まじりかおまかせの三人も口を揃えた。

きすすな

素晴らしい日記帳 ある夜、お兄ちゃんが日記帳を忘れて帰った。「母さんがおまかせが痛い」といった順ちゃん(二)人では心を

漁師の父、転落死

漁師の父親は六年前、海に落ちて死んだ。カニやコチを取って突風が吹き出し、帰港する途中だった。あとには幼い子どもと母親、そして船の借金が残った。二十万円

働いて生活支える母

千五百円。「子ども三人を太らす(食)のためやないとできないほど忙しい仕事」だけに、「二人だったら夜の商売でもやっていた」と母親は振返る。

炊いた……」。学校の担任が赤ペンでのおまかせ(三)に「ね」と書きかかっていた。藤谷さんは、この話、文章の素晴らしい感動した。

ちろん後片付けも腹審判だ。よの君は小学五年の時、見よ「見まねでいん飲き方を覚えた。今では、野菜いため、八宝菜も作れる。おまかせ、順ちゃんも続いて炊事

だれ」「私、のおまかせ」といった会話が夜になると始まる。「ぬいから」どのおまかせはじりやが、こんなスキップが母子のきずなを深める。「竹を割った男性的な性格の母親ですが、子どもたちにとって何が大切かよく知っておられます」と藤谷さん。

兄妹交代で夕食づくり



小学生に勉強を教えるのは大変だ。初めは3分と教えられなかった中学生も、何回か繰り返すうちに30分教えて新記録 二新居浜市徳常町で

が好きな「むじり」。「あんなにっから毎日でも行きた」とよの君。が、一番うれしいのが、実は三人を見つめてきた藤谷さんだ。

「よの君は他人のために働ける子。文通で、初めて返事が来た時のおまかせは、それはうれしそうでした。順ちゃんは、私の家でもおまかせの後片付けを自然と上手にやってくれました。いまはむしろ、経済的に恵まれた家庭の子の方に問題が多いようです。ひすみだらけの社会の中で、三人はすくすくと育ち、善悪を知り、感謝するところが、真心をもっています。私にだって宝物のような子どもたちがいます」

いま、週一回、家族を訪ねてくる男性がいる。母さんの彼氏だ。子どもたちは「おんちゃん」と親しみをこめて呼ぶ。「前から欲しかった体操服をおいちゃんが買ってくれたうれしかった」とよの君。のおまかせは、好きな釣りに度々連れてもらう。子どもたちがうれしそうに話すのを聞いた藤谷さんは「おいちゃんが母さんにとって大事な人なら、あなたも大事にせなあかんよ」と話した。三人は、こっぴどいすずいた。

母親は、毎日、子どもと「ふとんの中で会話を覚えた。今では、野菜いため、八宝菜も作れる。おまかせ、順ちゃんも続いて炊事を覚えた。働き詰めの母親、緒にふとんに入る。今日はい

各地のたより



主の愛を 全身に感じて

仙台伝道部専任宣教師
工藤 正敬

私が改宗してから6年の年月がたちますが、現在、主が最も愛される僕、宣教師として働けることは、実に夢のようです。毎日、主の安らかなみ手に包まれ、みたまを伴侶として生活できることはとても幸せなことで、主の愛を全身に感じています。

こんな私が主に仕えようと伝道をかすかに決意したのはもう5年も前になります。それからというものは見ようみまねで伝道に備えることを始めました。しかしながら両親の反対に喘ぎ、大学の勉強で悩み、また伝道資金などの経済的な問題を解決しなければならない状況にあったため、だれもがそうであるように私も準備は一筋縄ではいきませんでした。それでも法律の勉強とアルバイトとを両立させる道を考え、希望をつなぐことにしました。それは私にとって孤独な道で、

必然的に努力と忍耐とを教えられました。

そんなある日のこと、大学3年の夏も終わろうとする頃でしたが、思いがけない出来事が起こりました。いつものようにアルバイトから疲れて帰ってくると、私のアパートに差し出し人の住所も名前も書かれていない封筒が届いていて、その中を開けて見ると、なんと10万円の小切手が入っており、同封のメモ用紙には「工藤兄弟、伝道頑張ってくださいね」と記されていました。私はこの夢のような祝福に膝をかがめ、主に深々と頭を垂れ、目頭をおさえるのが精いっぱいでした。お礼の申しあげようありません。

それからというもの時間や仕事に恵まれ、私は伝道に赴く日を楽しみに毎日、時を過ごすようになり、主と深く交わるようになっていきました。しかしそれとは裏腹に、田舎に住む両親の願いは私が進みたい道とは異なり、自分たちの夢と願いを息子に託すかのように、大学を卒業する前に安定した職業に就いて、自分たちを安堵させてほしいと嘆願するのです。私はこのことでとても悩み、自分の力のなさや至らなさや自責の念を覚えました。次第に年老いていく父母の顔を思い出すたびに、「本当にすみません。でもどうか私のわがままを許してください」と、心の中で許しを請いました。私は力がなくとも必ず、近いうちにその恩に報いるから……と。

母は私を20歳にして生み、未熟児で生まれたため病弱であった私を父と母は自分たちの持てるすべての愛と力を注いで育ててくれました。また父と母の名前の一字ずつを取って名付けてくれました。これまで私は両親の切なる願いが天に届くかの如く、両親の庇護の下で何の不満もなく成長しました。私は両親からどれほど愛されているかを考えるとき、心底から両親に感謝したい気持ちになります。そのような状況下にあった私は、伝道への決断は正しいかどうかを一心に主に伺わなければなりませんでした。

時間の経過とともに私の心は次第に宣教師となることに傾いていき、すべてを投げ打ってでも主に従いたいという気持ちが強くなりました。そのような孤独な

私に対して支部長は「神から選ばれた者はとことん試されるが、必ず、すばらしい祝福があるよ。よく耐えたね、工藤ちゃん」と言って私を励まし、共に男泣きに泣き、私の選ぼうとする道が主のみむねにかなうことを確信させてくださるのでした。

またそれと相呼応するかのようには、支部の会員たちも我が身のように親身になって励ましてくださいました。空き巣に入れられ、私がいちたての給料を盗まれて途方に暮れていたときにも、支部の方は温かな愛の手を惜しむことなく与えてくださいました。私はどれほど教会員であることを喜び、感謝したことでしょう。

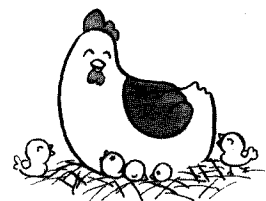
やがて大管長より召しを頂き、主の宮居である神殿に参入できるようになってからというもの、天から新しき知恵を賜り、私は自分の先祖への思いが強まりました。厳しい自然環境の中で貧しい生活をしてこられた先祖たちに深く感謝し、なんとかして彼らの願いをこの身を通してかなえてあげたいと思いました。

私がこの現世でのすべての行程を全力で走り抜き、主に喜ばれる日、私を生かし、救いを与えてくださる主にお会いできる日を心から夢見ています。(くどう・まさのり 1962年生まれ、横浜ステークス部小杉支部出身)

新役員の新聖任(任命)

8月16日から9月15日までに日本東京管理本部会員記録統計課に通知のあった役員の新動(敬称略)

- 郡山地方部郡山支部
新支部長：樋口文男(前任者：辻芳)
- 名古屋ステークス部名東北ワード部
新監督：山口貴幸(前任者：翠勇夫)
- 広島ステークス部五日市ワード部
新監督：成林孝治(前任者：塚本英輔)



新潟地方部 新潟支部教会堂 改装なる



が神から与えられた地であることをはっきり知ることができます。この地上に真の教会が回復され、神の正しい福音を学べることを主に感謝します。(新潟支部幹部書記・田中武夫)

新潟支部オープン ハウスで大がかり な展示物を製作

献 堂式から50日。広く、そして明るくなった建物を披露し、末日聖徒イエス・キリスト教会を知ってもらおうと、去る7月12日午後、新潟支部ではオープンハウスを行ないました。

この日のために活動委員会の委員長である大滝良作兄弟を中心に入念な計画が組まれました。それから1カ月以上の準備、製作期間を経て、それぞれの組織が工夫した展示物を作ることができました。

当日は、はっきりしない天候で、一時は激しい雷雨にも見舞われましたが、会員一人一人の伝道の成果もあって、100人ほどが集いました。

展示会の中で特に注目を集めたのは、教会を紹介するコーナーの世界地図と日本地図で、若い男性と若い女性の5人が中心になって作りあげたものです。陸地を発砲スチロールで浮か上がらせた量4枚分の世界地図には、各国の教会員数と神殿の最新情報が記載されました。一方日本地図はポスターカラーでステキ部、地方部に塗り分けられ、ワード部、支部を画鋏^{びょう}で留めて位置を示しました。

地図をOHP(オーバー・ヘッド・プロジェクター)で発砲スチロールに拡大して色を塗り、陸の形に電熱線で切り抜き、青く塗った板の上に組み合わせ張り付けていくという作業は予想以上に大変な仕事でした。しかし完成したときのあの感動は忘れることはできません。

世界地図では教会員のいる国をすべて紹介したわけではありません。教会員数が少ないながら活動している国がたくさんあり、地図に載せ切れなかったのです。

「神 殿の中にいるみたいだわ」——完成直後の教会堂に入ったある姉妹の第一声でした。

前日の雨も上がった1986年5月25日、東京北伝道部のラモント・W・ムーン伝道部長の霊的で、力強い祈りによって、新潟支部教会堂は再献堂されました。

10年間の風雪に耐えてきた前教会堂に増改築を加えた今回の工事は、冬期間の工事ということで、教会員も工事関係者も非常に苦勞いたしました。特に外装工事は、100日にもわたる積雪期間のため、思うように進みませんでした。また工事期間は5部屋しかないビルを借りて礼拝行事を行なっていたため、非常に不自由な思いをいたしました。しかしその甲斐もあって、以前の建物よりもずっと明るい、しかも延床面積では倍近くのすばらしい建物となりました。

新潟支部は新潟市の郊外の閑静な新興住宅地にあります。教会がこの地に建った頃は、周りは水田でした。しかし10年後、周囲は住宅が建ち並ぶようになり、伝道するようにと主から勧告されているように感じます。

このようにすばらしい土地に改めて教

敷地面積：1944.30㎡
建築面積：384.86㎡
延床面積：637.92㎡

会堂をいただいたのも、新潟支部の教会員一人一人の奉仕と犠牲、断食と祈りの成果です。会員たちのそうした行動に感謝せずにはいられません。特に地方部の施設代表として、今回の工事に献身的な働きをしてくださった吉野博兄弟に心より感謝しています。いつまでも「神殿の中にいる」心持ちで集っていきたいと思います。

新潟支部は今、大きく成長しています。聖餐会ではこのところ礼拝堂にいっぱい人が集まり、主の犠牲を思い、指導者の話に耳を傾けています。それが家庭の中にまで浸透し、教会員一人一人の霊的な面でも成長しているように感じます。今年の支部目標は「福音を生活の中で実践すること」「一致する」ことです。この目標に向け、支部長会、長老定員会、扶助協会、若い男性、若い女性、初等協会が一致結束してまい進しています。

再献堂された教会堂に立つとき、ここ

各地のたより



大関洋一支部長

●新潟支部所在地：
〒950 新潟県新潟市
長潟3-10-14
☎0252(86)7513



また日本地図では、ワード部支部が数多くある東京周辺部は、拡大地図を作らなければ位置を示すことができませんでした。それに比べ、新潟地方部はあまりにも寂しいように感じ、より一層伝道の必要性を思わされました。

そのほかの展示物として、扶助協会では「女性の才能の場」と題し、各人が日頃から努力して制作した絵画や手芸品などが展示されました。初等協会では子供たちが自画像を描いて自分たちを紹介しました。また映画の上映もあり、教会員でない方はもちろんのこと、教会員も改めて教会を知ることのできる場でした。

このオープンハウスを通して会員一人一人の隠れた才能を知ることができました。またこの企画を短期間にまとめあげることにより、今年の支部目標のひとつである「一致」を図ることができました。神は私たち一人一人に違った才能を与えてくださり、各人がその才能を発揮してひとつのものを作りあげるときに主のみ

手があったことを知ることができました。

新しい建物での初めての企画であったオープンハウスは、夜8時に幕を下ろしました。私たち新潟支部はこの時点をもって新たに出発したように思います。い

つまでも「オープンハウス」の精神を忘れることなく、周囲の方々に様々な活動を通じて教会を紹介していきたいと考えています。(レポーター：新潟地方部若い男性会長・田中武男)



●各国の教会員数と神殿の所在地を示した、暁四枚
大の世界地図

■編集室から



●心に残った記事の感想文、各地の話題や行事、「日々の恵み」コーナーの証、「職業と信仰シリーズ」、カットなどをお送りください。来年度1月号掲載分の締切りは11月10日(必着)です。投稿には必ず連絡先(電話番号)と教会での責任(役職名)、生年月日を記入してください。お送りいただいた原稿は一部手直しすることがあります。

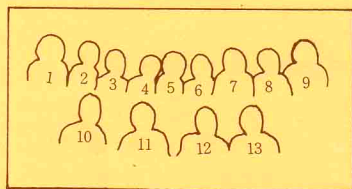
●あて先：〒106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室 ☎03(444)5264

■お知らせ(教会書籍の注文および送金先の変更)

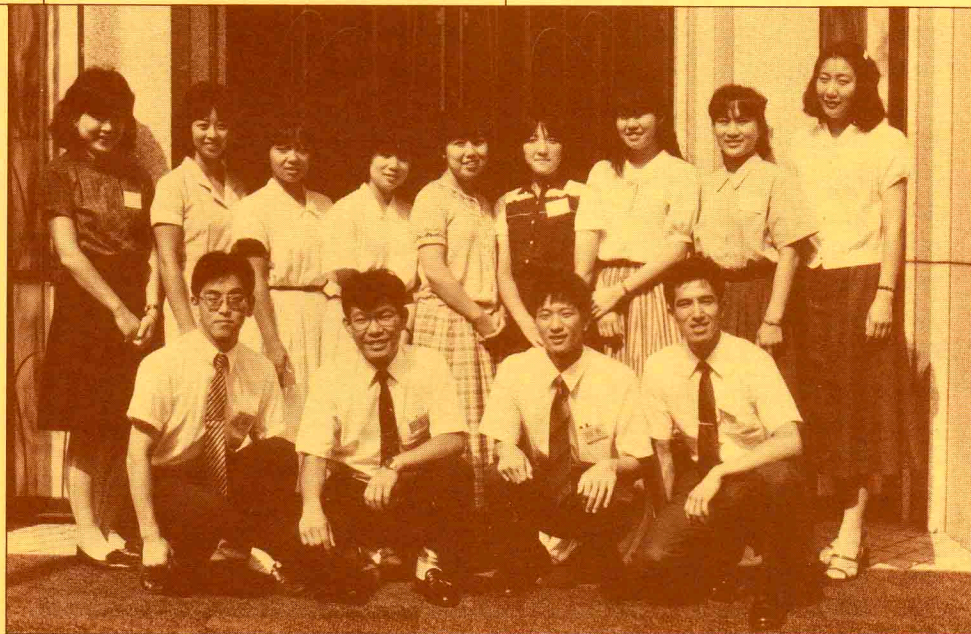
●教会書籍および「聖徒の道」のお申し込み先(送金を含む)が従来の渋谷ブックセンターから管理本部経理課に10月8日付で変更になりました。商品についてのお問い合わせは渋谷ブックセンターですが、ご注文は次のあて先にお送りください。

●〒106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会管理本部経理課 ☎03(440)2351(代表)、郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 管理本部経理課 口座番号/東京 0-41512)

8月に召された JMTC第87期生 13名の名簿



S：ステーキ部，D：地方部
W：ワード部，B：支部



〈名前〉

1. 小島 初子
2. 仲岡 久子
3. 村川 淳子
4. 山下 博美
5. 菊地 多佳子
6. 加藤 映子
7. 関 真由美

〈出身地〉

- 東京南S / 渋谷W
高松S / 八幡浜B
福知山D / 彦根B
岡山S / 福山B
仙台S / 石巻B
名古屋S / 春日井B
東京西S / 国立W

〈伝道地〉

- 大阪伝道部
名古屋伝道部
東京北伝道部
東京北伝道部
札幌伝道部
札幌伝道部
札幌伝道部

〈名前〉

8. 富樫 公枝
9. 小林 秀江
10. 貞国 康之
11. 中野 博史
12. 狗巻 孝
13. 山梨 政広

〈出身地〉

- 盛岡D / 秋田B
札幌M / 函館B
大阪S / 阿部野W
高松S / 徳島W
大阪堺S / 三国ヶ丘W
東京西S / 八王子W

〈伝道地〉

- 東京南伝道部
名古屋伝道部
名古屋伝道部
札幌伝道部
札幌伝道部
神戸伝道部